
スケベ勇者の桃色珍道中～目指せ、ハーレムの旅～

黒神王輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スケベ勇者の桃色珍道中〜目指せ、ハーレムの旅〜

【Nコード】

N7655Y

【作者名】

黒神王輝

【あらすじ】

勇者というものを、御存知だろうか。

礼儀正しく、打倒魔王とかそんなものに燃えて、国の奴隷として安っぽい金と装備で街を放り出される可哀想なヤツである。

そんな勇者の称号を嫌々ながらに習得したキルシュは、その王道展開を悉くぶっ潰していくのだった。

変態シモネタ上等！ 御都合満載、メタさ満載、イケメン美少女変態満載のくたばれ正統勇者ファンタジー。勿論、シリアスなんてぶっ潰します。

序章 ハーレム&逆ハーレム(前書き)

ライト&メタの新境地を開く為の実験台です。

序章 ハーレム&逆ハーレム

旅立ちには、理由が付き物だ。

本当の理由に、建前で蓋をして、尤もらしい事をでっち上げる。事、勇者に関しては、八方美人的な意識が必要になるという。

世界の平和を守りますー、とか。魔王を退治しに行っちゃうよー、とか。聞けば、大半は魔王に金を貢いで影を潜めてもらっているとか。夢も希望も勇気も無い話だ。けど、現実である。

しかし、残念ながら勇者はなるうと思つてなれるものではなく、血統である事が多い。その所為で、国王や村人達に良い顔をしなければならぬと言う強制が目立っているのだ。示しがつかないとか、いいじゃんどうでも。俺の生活を動かす為には、全く関係ないし。

「勇者よ……勇者キルシュよ」

「あー……？」

呼ばれて、適当に返事をしつつ向き直ると、むさつ苦しい髭面が目に入る。

こんな何の変哲も無い、無駄に髭だけが立派なステレオタイプの国王なんて、もう時代遅れだろう。新進気鋭の爽やかな王でも嫌だが……うん、女王様がいいよ。皆大好きだろ？

こつちの態度に咳払いをして、王は無駄に低い声で言葉を発する。普段の間抜けな声音とは、えらい違いだ。

「キルシュ。お主は剣が得意ではなかったな。熱心に我が国 エメラキスカ王国の象徴である風の魔術を学び、そしてどんな人物とも いや、傭兵と親しくしていたな。そこで、得るものがあつただろう？」

「当然っ！ 究極のスカートめくりに挑戦すべく魔術を学び、傭兵からは女の落とし方、ムフフなテクから楽しい楽しい小話にピッキング技術！ 軽い身のこなし方も教わったぜ！ 後、足音や気配を消す方法とかな！ これで風呂とか覗き放題……悲願成就も近いぜ

っ！」

ガッツポーズをカッコよく決めるこちらを、何故か苦々しい表情で王は眺めていた。

「……勇者というよりも、なんだか盗賊になつたらんか？ それも、かなり雑魚臭がしておりそうな……」

「あ、パラメーター見る？」

「え！？ 見れるの!？」

名前：キルシュ

LV : 1

職業：勇者（笑）

ステータス

体：16

力：6

技：10

速：10

守：3

魔：14

運：255

特殊技能

スカートめくり二級、魔術・風、魔術・水、魔術・炎、傭兵の心得、盗賊の心得

「どうよ!」

「どうよ……ではないわア!」

流星に頭に来たらしく、王は顔を真っ赤にして怒鳴りたててくる。五月蠅い。

「そもそも何故パラメーターが出せる！ そして勇者に（笑）がついておるぞ！ それにスカートめくり二級だけ明らかに浮いておる！ 後、運がカンストじゃあああ　　っ!！　もつと別の能力があるじゃろおおお　　っ!！」

「じゃあ、勇者らしいパラメーターって何だよ」

「え……体力が高く、力もあり、守備もある」

「んで、足が臭い。超水虫」

「何故じゃっ!?!」

「あーあー、うっせえうっせえ。んで、俺に何の用？ アンタ、俺嫌いじゃん。娘とかに近づけさせてくんないし」

「あつたりまえじゃ！ スカーレットなら五億万歩譲って紹介してやらん事も無いが、お前は不真面目すぎる！ あやつも大概だったかな！」

勇者一族に生まれ、その次男として育った自分。

兄であるスカーレットが勇者の任につくはずだったが、勇者として魔物の集落を討伐しに行き、そのまま帰ってこなかった。だから、次男である俺が寄越された始末。

無論、そんなのはお断りだ。女の子とイチャイチャしてたい俺にとつて、勇者の使命なんざ邪魔でしかない。

夢はでつかく、ハーレム王。あ、俺……今、真理に気付いたかもしれない。

「英雄色を好むって言うだろ？」

「そうじゃな」

「俺、超英雄じゃね!?!」

「お主はただの色狂いじゃ……。ウチの使用人達のスカートが、何回スカートめくりの犠牲になったか、考えたくも無い」

「でも、アンタそれ見て鼻血吹いてただろ」

「ば、馬鹿モン！ あれは、どろり濃厚トマトジュースが鼻から逆流しただけで……!」

「いつも王様はトマトを残すんです、ってメイドの一人が微笑してたけど？」

「と、ともかくじゃ！」

仕切りなおすように咳払いし、指を差してくる。

「ちつとは勇者らしい事をしてこい！ 頼むから！」

「何でだよ！ 俺、別に好きで勇者になったわけじゃないしさあ」

！」

「勇者の権力使いまくっておるじゃろ、お前！」

「キルシュ、イツテキマース！」

こんな理由があってもいいじゃない、人間だもの。

「あー、ついてねえ……。勇者っぽい事って何だよ」

くさくさしつつ街中を歩いていると、良く手を振られる。女性も男性も、構わずだ。

「おう、エロ勇者！ とうとう追い出されたか？」

「うっせーよ。何か、勇者っぽいことしろってさ」

「ムリじゃない？ それより、これ食べてみてよ！ 美味しく出来たと思うんだけど」

「アンタなあ、彼氏へのお菓子の毒見役を俺にやらすなよ」

「え？ これ、お父さんにだけど……」

「むっちゃええ子やん！ ……ん、男が食うには、少し甘みが強えんじゃね？」

「ありがと！ 参考にしてみる！」

「ゆうしゃさまー！ あそんでよー！」

「おいおい、君みたいな子に手えだしたら流石に豚箱行きだしさあ」

「勇者殿……今日も凄まじい性欲ですな」

「いや、だから手えださねえっての！ 何を聞いてたんだ！？」

街の住人とは、仲がいい。週に一度の日課の所為で嫌われていると思うのだが、どうなのだろう。

親しくしておきたいのは勇者の名目だけで、本当は……。なーんて考えても埒が明かないので、適当に歩いていく。

と、空に風船が舞い上がっている。高度はどんどん上昇し、今や天に召されようとしていた。

「ふーせんがあ……」

「仕方ないでしょ？ 手を離すのが悪いんだから……」

「でも……うっ……うっ……」

「ああもう、泣かないの！」

そんな親子のやり取りを見兼ねて、俺は建物の陰に隠れ、点になりつつある風船へと手をかざした。

空気中の魔素と呼ばれる物質を、自身の精神を触媒に魔力へと変換し、正面に飛ばす。これが、魔術の基礎。

普通は力いっぱいぶつける事しか念頭に無い。魔術は、対魔物や山賊の切り札で、威力が問題でもあるのだ。

しかし、そう言う連中は決まって馬鹿だ。数をこなして強くなるうとしているから。

必要なのは、効率よく魔素を集める集中力と、大量変換に必要な精神力。そして、受け皿となる己の体力だ。無論、俺はこの三つを幼少より鍛えている。

更にコントロールの修練を積みめば、スカートめくりは当然、こんな事も出来るようになる。

「紡ぎ、そよげ……」

詠唱は魔素を魔力変換し、展開した魔方陣に飛ばす役目を担う。

魔方陣に届きさえすれば、何でもいいのだ。下級なら、言葉数も少なくてすむ。まあ、魔力によりけりだが。

「手繰り寄せる風の腕かひな」

魔術名を叫ぶのは、イメージを固める為に必要な行為。これもまた、発生させた魔方陣に届かせる事で、発動の引き金となる。ちなみに、イメージさえ出来れば、言葉は何でもいい。事実、今のイメージに合わせて適当に言ったただけだ。

言い忘れたが、変換できる属性は本人の素質に由る。俺は風と水、そして炎が使える。

で、俺が思い描いたのは、風の腕。イメージどおりに顕現した風が、遠く離れた風船を優しく抱き寄せ、こちらまで持ってくる。

泣いていた少女の前に風船を持って行ってやり、彼女が持ったと同時に魔術を解く。勿論、気付かれないように。

「ママ！ ママ！」

「……えっ！？ それ、どうしたの？」

「風が吹いてね、こっちに来てくれたの！ で、持つまでまっつてくれたんだよ！」

「……そう。じゃ、感謝しなきゃね」

「誰に？」

「頭がくすんだピンク色の、お兄ちゃんに。ね？」

そんなやり取りを背に聞きながら、キルシュは歩いていく。

行く場所は、自分の家だ。

裏路地にある酒場。昼間は酒の営業はしていないのだが、軽食や昼食なんかを食べさせてくれる。

スウィングドアを押して入ると、昨日が残っているのだろう微かな酒臭さと煙草の臭い。それらを埋め尽くすように、料理のよい香りが漂っていた。

店主である男がこちらを見、何かを投げ寄越してくる。油紙に包まれたそれは、暖かいホットドッグだ。

「ちゃんと食べよ？ お前、男のくせして食が細えからな」

「サンキュ」

包みを開けつつ、空いていたカウンター席に腰掛ける。

店内は木造で、そこそこ広い。夜は大柄な客や冒険者などで賑わうが、昼は学者やらも軽食を摂りに来ている。そこそこ繁盛しているのだ。

「どうしたよ。いつも日課もその調子じゃ成果なしか？」

「いや、まだやってねえ」

マスタードたっぷりのをそれを齧る。分厚いボイルウィナーと新鮮な葉野菜の食感が見事で、相変わらずピリリと舌を刺激するマスタードソースが最高だ。ホットドッグは、この店が俺にとっての一番だと思う。

そんなこちらを、昼に星でも見たかのような目で見ると店主のワーグナー。

「お前……熱でもあるのか!? あの『桃色の脳細胞』とか『煩惱の塊』とか言われてたお前が!？」

「……誰が言ってた? 裸に剥いて教会の十字架に一日中逆さにするして曝してやる!」

「スカートめくりが特技で、一ヶ月の下着の色を統計しているヤツがそんな事いうのか……」

高尚な日課とは、風の魔術でスカートをめくり、瞬時に見定めたパンツの色を統計して、この街の性欲推移を図るものである。

この街は純白が六十とかなり素晴らしい結果を残している。個人的には黒もありだが、たまに見かける紅いのはどうかと思う。まあ、好き好きだとは思うが。

「それよりも聞いたか? お前みたいなヤツが居るんだと、しかも悪質な」

「ああん? 聞き捨てならねえなそりゃ! この街の女性を傷つけるヤツア、この俺が」

「同じ事を言わせる気が、アホ。……女性だよ。その犯人。ターゲットは、若い男だ」

「はあ……?」

何が楽しいんだよ、それ。

と、カウンターで食事をしていた青年が、ものすごい形相でその話題に食いついてくる。て言うか、それ餡子入りパスタライスじゃん、ゲテモノメニューの。舌大丈夫か?

「オレが……オレが被害にあったんだ! 初めて出来た彼女とデートしてる時にさ、その女が通り過ぎて、下半身が一瞬で露出しちまつたんだ!」

誰が得するんだ、そんなの。

良く見れば、顔立ちの整った青年だ。パツと見、神経質そうで、故にモテなかったのだろう。不憫な話だ。まあ、とりあえず口の周

りの餡子拭けよ。

「彼女からは『……ちっさ』って言われて、その通り過ぎてった女の子は『残念、好きじゃないですねえ』って言われて……。で、彼女に……フラれたんだ……」

「う、うわぁ……」

ワーグナーと二人で、顔を引き攣らせる。そんな、えげつない。

男の自信を根こそぎ奪う鎌のような言葉を吐く女……なんて恐ろしい。そして餡子を拭け。

「オレが多額の金を払って情報屋に問い合わせても正体不明。ただ、異国の剣やら色んな武器を扱うそうだ」

そう言い終えると、男は袋をカウスターに叩きつけるように置く。中で弾けた音からして、金貨だ。それも、相当枚数の。いやだから拭けよ、餡子。

「頼む、勇者！ ヤツを……ヤツを殺してくれ！」

「ヤダね」

鼻で一蹴し、餡子に塗れて情けない男の面を笑ってみせる。

「殺してなんになる？ お前はその女に見下されたまま、生活しなきゃなんねえ。何故、そんなことが出来るんだ？ そんなの俺はごめんだね。根性無しの尻拭いもな」

「あ……」

悔しそうに歯噛みする青年から顔を逸らしつつ、視線だけ向けて、神妙に聞いた。大切な事だ。

「そいつ、可愛いか？」

「あ、え……？ えっと、幼さが残るセクシー系って言った様な……」

「じゃあ俺の女にする！ 決まりだ、ハーレム計画の一端を担う存在になつてもらわにやな！」

「な、なら……これを軍資金に」

男が次に紡ごうとした言葉を、食べかけのホットドッグを口に捻じ込んで黙らせる。餡子と最悪なハーモニーを奏でること、請け合

いだ。

「その金で次に出来る彼女にプレゼントでも買ってやれ。俺が女口説きに行くのに、何で金が要るんだよ」

席を立ち、店の奥にある私室に入る。

木造の小さな部屋だ。ベッドと机があり、替えの服がたたんで数セット置いてあるだけの、簡素な部屋。

白い気品のあるズボンと、黒い襟付きのシャツはそのまま。若草色のローブに、激しい動きにも耐え得る革のブーツに履き替える。短刀や小道具を収納したポーチをベルトに括りつけ、準備は万端。

店内に戻ると、青年と同じくらいの年齢の男達が、こちらを見ていた。

「お願いしますー！」

「だーかーらー、俺は女口説きに行くだけだつての！ ほら、散れ散れ！」

手をパタパタさせて男達を解散させつつ、俺は駆け出し、「紡ぎ、纏え……誘い吹く風の跳ね靴」

魔術を発動させて、文字通り跳んだ。すると、風が身を運んでいく。高い建物へと、誘われるように。

上から見下ろす街並みは、とても綺麗だと思う。

ちゃんと整理されて作つてある石畳の通路に木造や古い石垣で出来た建物。同じく、整理して張り巡らされている用水路。

行きかう人々にはほとんど貧富の差はなく、スラムもない。賑々しい市場を筆頭に、カッコいい、可愛い、逞しい、知的な少年青年が盛りだくさん。

「……いいなあ」

涎が出そう。

「おっと。いけないいけない。この街ではあんまり騒ぎにならない

ようにしないと……」

前の街みたいで、不細工でむさい男の人たちから追い回されるのは勘弁だ。

「でも、もう騒ぎになってんぜ？ 若い男の下半身を通りすがりに露出させる最悪な女の噂」

背後から届く、青年の声。いい声だと思う。軽い感じがしているが、それとは裏腹に伶俐さも幾分かある。こちらの対応を決めかね、そしてどういった風にでも対処できると言った自信と警戒の現われでもあるのだろう。

とりあえず出方を伺うべく、会話を続けてみる。

「そう？ でも、この街にはスカートめくりを生きがいとしている人もいるみたいだし……」

「ありや趣味だったの。下着の色の統計をつけるのが、習慣なだけだ。習慣をどうこうと口出しされる謂れはないね」

「凄い理屈」

言いつつ、振り返って見た。相手の顔を見ないことには、始まらない。

「え！？」

「おっ！？」

好みをストリートで打ち抜いた男性が、そこにいた。

紫だかピンクだか分からない、中途半端な色の髪を長くし、不思議な模様をした黒のバンダナで適当に髪を止めている。

瞳も同じような色をしていて、黙っていればクールな二枚目という顔立ち。バランスの取れたスタイルも、足の長さも、纏っている服の質も、嫌味にならない程度に上等で、男女共に好かれそうだ。

そんな彼は、こちらを見て驚いたような顔をしている。何なのだろうか。

正直に言うと、メツチャ好みだった。

色素の薄い、金とライトブラウンの中間をいく癖のある髪を長く
なびかせ、あどけなさを残す可愛らしいが美しい顔をこちらに向け
る。

少しだけだが見開いている瞳の色は、蒼。物に動じないのか、知
っていたのか、背後から話しかけたのに会話を交わせる余裕もある。
性格も、そんなにキツそうではないか。どちらかと言うと、天然系
に見える。

が、あまり表情には出ないようだ。苦勞をしたか、人を多く殺し
てきたか、精神に障害があるのか。感情が表に出ない人物は、大抵
そんなものだ。

ともあれ、自分より頭一つ低いくらいの身長も、バランスの良い
プロポーシオンも、小洒落た青いドレスも素晴らしい。特にドレス
は肩紐が細く、体のラインが強調される上にスリットまで入った大
人のイメージで、どこかあどけない彼女と背反しているようで、そ
こが実にツボである。

「あの、ちよつとズボンを下ろしてくれない？」

「いきなりアグレッシヴな発言頂きましたー！ て言うか、それが
おかしいだろ！ 何でだよ！」

「え……私のショーツも見せなきゃダメ？」

「ケツ、自発的に見せられても意味ねえよ」

「え？ あなた、スカートめくりの人でしょ？ パンツが見たいん
じゃないの？」

「馬ツ鹿野郎！ 全然違えよ！」

そう言う事ではないのだ。同好かと思ったら、ロマンを全然分か
っていないらしい。

拳を握り締め、瞳に炎を宿しつつ、力説する。

「恥ずかしながらもじつくりとたくし上げられるのがいいんだ！
それが、自分でスカートをめくるとかな！ 恥ずかしがるってのが
大事なんだよ！ それに、俺自身が見ること見せることに関わって
いないパンツに興味ねえ！ それに、パンモロよりパンチラの方が

何かエロいし!!」

有能である諸君らは、勿論賛同してくれるよな！ 例え理解されなくても、この胸にくすぶっている何かが反応しているはずだ！

「……ヘンなの」

首を傾げる少女に向けて、今度はこちらから質問せねばなるまい。「んで、何でお前は男の尊厳をスタスタに引き裂くような真似をしてるんだ？」

「……えっとね。右の太ももに、大きなほくろのある男の人を探してる」

「何で？」

「……仇だから」

彼女の表情は変わらないが、雰囲気が違う。穏やかな普段のものから、波紋も何もない水面のように静かなものへとシフトしている。静かなる殺意だろう。

「……父親の仇か？」

「ううん」

「んじゃ、母親？」

「違うよ」

「……恋人？」

「正確には、片思いだった。私の、ね」

恋人を、取られたのか。

「その人、幸せにするって言ってたのに……死んじゃった。片思いの人、自殺しちゃったの。だから、私はあの男を見つけ出して、ぶん殴る」

「だからって、ズボンを切る事は……」

「顔も覚えてないし。覚えてるのは、彼との一夜を偶然見た時に目に付いた、その特徴だけ。いきなりズボンを脱いで、だなんて、聞いてくれるはずないしね」

だからって、切る事はないだろうに。

と、彼女が浮かべた微笑は、幼い顔立ちにあまりにも不釣り合いで。

大人のような反面、子ども染みた純粹さを覗える。こんな子が暴れたら、相当拙い。

いや、それ以前に！ 今冷静になって考えてみたが、それちょっとおかしくね？

「……あの男？ 好きだった人は、男なんだろう？」

「うん」

「お前が追ってるのも、男？」

「そうね」

「え、ちょ……って事は、オトコドウシデスカ……？」

「そうよ」

臆面もなく表情も変える事も無く端的に言ってくれました本当にありがとうございます！

「う、うわぁ……。そりゃ、八つ当たりすんのも当然だわな」

「え？」

「ん？ いや、そうだろ？ 男にとられたから、その美少年に八つ当たりを……」

「ううん。最初はそのつもりで、探すのめかかねてただ……。段々、美少年が好きになって。逆ハーレム計画でも作るうかになって。

今は、それぞれのナニに感想を言うのが趣味なの」

「発想が凄い方向に飛んでってるなあオイ！ ……ん？」

逆ハーレム創造を目指している？

ならば、これは……同じ趣向じゃないか！ 実に素晴らしい！

「なあ、俺はハーレムを目指してるんだ。美少年はお前に、美少女は俺に。二人で一緒に、目指さないか？ ハーレム計画！」

と、こちらをポカンと口を開けて見てくる女の子。いや、そりゃ確かにヘンな事を言っている自覚はあるが、効率がいい。何より、美少年に相手を取られなくてすむ！ これ、重要。

しばらく考えた後、彼女は柔らかく微笑んで、頷いてくれた。

「……うん、いいよ。じゃ、私からも一つ。無条件で協力する代わりに、ね」

「おう！ 俺は勇者だからな！」

「どこかで右の太ももにほくろのある人に出会ったら、殺すか、私に連れてくるかの二つ。いい？」

「おう！ 協定成立だな。俺はキルシュ。十九歳」

「私はエトワール。十七歳」

「つてなワケで、ちよいとステータスを拝見しまーす！」

「え？」

名前：エトワール

LV : 6

職業：ウエポンマスター

ステータス

体：27

力：16

技：21

速：23

守：0

魔：0

運：51

特殊技能

剣士の心得、樵の心得、射手の心得、多数戦の心得

「……凄い特技。初めて見た」

空中に浮かんだ文字と数字を見て、彼女 エトワールはかなり驚いているようだ。てか、強いなアンタ。戦わなくてよかったー。

「じゃあ、キルシュのパラメーターも見せて？」

何だか、かなり見劣りしてしまうが……まあ、いいか。

「あらよつと！」

名前：キルシュ

LV : 1

職業：勇者（笑）

ステータス

体：16

力：6

技：10

速：10

守：3

魔：14

運：255

特殊技能

スカートめくり二級、魔術・風、魔術・水、魔術・炎、傭兵の心得、盗賊の心得

「ぷっ……なんで、勇者に（笑）がついてるの？」

「うっせ！ こっちみんな！」

「それにパラメーターが盗賊寄りだよ？」

「ゆ、勇者がみんなマツチヨメンだったら怖えだろ！ 俺はイケメン担当！ 文句ないだろ！」

「うん、黙ってたらカッコいい。残念なイケメンかな」

「おおーい！ 残念とか言うなよ！ 俺のシルクのハートがクラッシュしちゃっまうよ！」

「それに、勇者の癖に面白おかしくしてスケベだし。普通、真面目でしょ？」

「面白おかしくてスケベな勇者でもいいじゃん！ それに決めるときは、びしっと決めるぜ！」

カッコいいポーズを取るも、彼女はどこ吹く風を眺めている。いや、こっち見ろよ。

溜息を吐きつつ、真っ直ぐにエトワールを見つめる。

視線に気付いてか、彼女も振り返って、俺の目をじっと見つめてきた。

「ま、何にせよ……」

「うん……」

どちらからともなく、拳を突き出し、

「一蓮托生ってな」

今、この空に近いこの場所で、

「うん。よろしく、キルシュ」

ハーレム建設の夢への協力を、ここに誓ったのだった。

序章 ハーレム&逆ハーレム(後書き)

……うん、完全に勢いですね。他のもかけよと思いますが、筆が進まないのをごちらを乗せて見ました。

一章 魔の森のロリババア 前編

ハーレム同盟結託、その次の日。

王の召集を受けた俺は、その場所に来ていた。相変わらず、馬鹿みたいに高そうなカーペットだ。醤油でも垂らしてやるつか。

「……んで、何か用？」

隣にはエトワール。二人で城に行き、王と向かい合っているのだ。王はこちらを見、こめかみを押さえた後、静かに尋ねてきた。

「その方は誰じゃ？」

「逆ハーレム目指すって言うから、俺と手を組んでもらったヤツ。

あ、街で噂の若い男をひん剥いてるヤツな」

「お前のパーティーは何かがおかしいぞ！ 何でよりによってそんなヤツを仲間にしとるんだ！」

「それは……」

「私達が……」

「熱い志で一蓮托生を結んだから！」

「何じゃその無駄なコンビネーション！ 息合い過ぎじゃろうに！ キメポーズまでクロスするようにピッタリだったのは予想外だ。

意外と、波長が合うのかもしれない。

豪華な玉座に座りなおしつつ、王は指を鳴らした。いや、鳴らすうとしてかすれた音しか出なかった。

「クスクス……」 「クスクス……」

「や、やかましい！ こそこそと笑うでないわあ！ ……おい、誰か！ 例のものを！」

と、数人のメイドが何かを持ってくる。

一つは小袋。一つは剣。一つは紋章だ。

小袋の中には金貨が十数枚に銀貨がそこそこ。剣は見たところ実用と装飾の狭間をいく美しい代物。そして紋章は、見覚えのある紫水晶の首飾り。

「おい、これって……『マジックシェイプ』か？」
「うむ」

変換した魔力を魔方阵に通す必要もなく、思い描いた形に固める事が出来る。魔力の剣とか、そう言う芸当が可能だ。

要するに、魔力はあるが魔術が扱えない連中が使いたがる物。本職の魔術師には、どう足掻いたって敵わないだろうに。

「俺には必要ないぜ？」

「持って行け。お前さんの潜在属性外も使用できる。金属系と雷系が使えるぞ？」

「……これから頼む仕事に、必要になるかもしれないってか」

「どうせ何も考えとらんじゃろうからな、しばらくはワシが仕事を世話してやる」

「はあ？ そんなのごめんだね。俺は偉大にして崇高なるハーレム計画の第一歩を軽やかに踏み出したところなんだ。仕事なんて絶対に」

「……森の奥に、魔女がいるのを知っておるか？」

「その話、詳しくお願いしまーす！」

くすつ、と笑いを零すエトワール。ああもう、一々可愛いなアンタ。可愛いは正義、これがオッサンだったらキレたと思う。

仕方なさそうに溜息を吐いて、王はゆっくりと話し出した。

「……この街の外れに、森があるのを知っておるか？」

「おう。たまに森の泉に水浴びしにいく若い女の子達が」

「お前はそっち方面から切り離して物事をおぼえて見せんか。……」

その森の奥に、魔女が住んでいる。彼女の魔力を我が国に有益な方向に活用させると誓わせるか、魔力を奪うかしてほしい」

「魔力を奪う？ それって……」

魔術師の魔力は、肉体がある限り際限なく沸き続けるものだ。限界まで使用したとしても、一度寝れば大半は回復する。

要は、奪っても奪っても出てくると言う事。それを枯渇させるには、根本から絶つしかないわけで。

「手っ取り早い話、従わなければ首を刎ねて来い。生け捕りにしても構わんぞ?」

至極簡単に言ってくれるが、相手の規模がまだ分からないので、動きようもない。

まずは外見だ。そうじゃなければ、そこら辺にいた女性全員を捕らえるか殺すかしなくてはならなくなる。

手始めに、俺は質問を投げてみた。

「そいつ、いくつだよ」

「二百と少しじゃと聞いておる」

BB Aじゃねえか!

「はっ、馬鹿馬鹿しい! 俺は老人介護の博愛精神なんざにみち溢れてねえんだよ! 他のヤツがやれってんだ」

「それは残念じゃな。その魔力で成長と寿命を止め、童女の外見にとどめておるそうじゃが……しかも処女」

「誰もやらなきゃ、俺がやる! そう、勇者は期待に応えますとも! フウーハハハハハハハハ ツ!」

勇者らしくない高笑いは、城内に響き渡っていたという。

堅苦しい雰囲気は皆無だったのだが、ああいった畏まった場所が苦手なのだろう。城の外まで出ると、エトワールは気持ち良さそうに背筋を伸ばしつつ、横目でこちらを見て話しかけてきた。

「……で、どうするの?」

「フッフッフ……。ロリババアと言う稀有な属性から手籠めにする機会がこようとは……!!」

ロリババアの定義に関しては、個人的に二つ定めている。

一つは、童女の身体にあった年齢で、言葉遣いや好みが婆臭い人物。

もう一つは、ロリな外見ながら、かなりの高齢をいく人物だ。個人的に、こっちの方が好みではある。だって合法ロリなんだもん!

「浮き足立つ俺とは裏腹に、エトワールは冷静な見解を見せてくれる。」

「でも、やめた方がいいと思うわ。魔力で身体を若く出来るんなら、相当強い魔力を持つてるはずだし」

「まあ安心しとけよ。俺、対魔術戦じゃ無敗だしな」

「何で？」

「秘策があるのは、まだ黙っておいた方がいい。魔素や空気のうちねりで精神を読めるレベルの魔術師なら、ばれる可能性が飛躍的に上がってしまうからだ。まあ、そんなレベルなら世界をとくに滅ぼしているだろうが。」

「とりあえず歯を見せながら笑う。驚きの、白さ！ 柔らかくはないが。」

「期待してな。んで、貰った剣はどうだ？」

「王から貰った剣は、エトワールに渡した。あのパラメーターにあっているだろう。剣士の心得もあつたし。」

「が、当の本人は不満そうだ。その場で半分だけ抜いて見せてくれる。」

「鏡みたいね、この刀身。斬れるのかな、これで」

「ミラーフラッシュと呼ばれる鏡のような刀身になる仕上がりで、傷一つないブロードソードの腹には、イマイチと言いたげなエトワールの顔が映っていた。」

「王の私物なんだから、何かしら効力があるんだろうけどな」

「知らないの？」

「見覚えがないんだよ。書庫なら片っ端から読み潰したけど、そんなもんはなかったかな」

「本が好きなの？」

「いんや？ 知ってれば、傭兵のお姉さんと意気投合して話できるかな」って思っつて、武器辞典五十冊丸暗記しただけだ」

「そのエロに関する力の源が知りたいわね」

「そりゃあ当然、俺の息子からさ」

「え、息子がいるの？」

「ああ、股間の方に一人な」

「それは素敵ね。是非、ここで見せて欲しいわ」

「フツ……脱いでいいのは、脱がされる覚悟のあるヤツだけだ」

先を歩いていたエトワールが立ち止まり、俺も足を止める。

伝わるのは張り詰めた空気。互いの意見が対立し、互いがどうしてもその意見を通したい時

「じゃ、脱がしちゃおうか」

「その前にパンツを奪われないよう気を付けるほうが先だぜ？」

「あ、私今日は履いてない」

「えっ！？マジでっ！？」

そう、人間は武力解決を念頭に置く。

目にも留まらぬ速さで踏み込んだエトワール。先程の剣を抜き放ち、軽々と一閃を放つ。

城から外れて、人一人いない街道に出ている。周りの建物の為か、窮屈な動きだ。それなら、こちらに歩があるかもしれない。絶対にあのスカートを持ち上げてやる！

バックステップで避け、高さを意識して跳んだ。

「紡ぎ、駆ける……天駆ける羽馬の靴！」

ショートブーツに風の魔力である緑色の輝きが纏わり付き、俺を宙にとどめてくれる。更に高い場所へと走る為、空気の波に乗ったり滑空したり出来る靴を魔術で作ったのだ。

が、

「嘘おっ！？」

「あら、ホントよ？」

遙か十メートルは飛んでいるのだが、跳躍でエトワールは追いついてきたのだ。絶対、こいつ人間じゃねえ！

「こなくそ……っ！」

呪文を言っている余裕はない。ただ、もう適当にぶちまけとけ！
おりゃああああああああああああああ
っ！

「！」
広さを意識して、今度は水の魔術を放つ。

叫びにありつたけの魔力を掻き集めて、展開したのだ。元々、イメージなんて幾千もの魔術を放てば思い浮かんでくるもの。詠唱は必要ない。とは言え、最近はそれを知らず、詠唱をしている馬鹿な輩もいるようだ。

魔方阵から流れ出たのは、威力はない水のヴェール。が、重さはかなりのもの。

「くっ……！」

空中にいたエトワールを水は叩き落とし、そして……

「おっほお！ これは……！」

水に濡れ、よりピツタリとしたドレスが、エトワールの殺人的なボディーラインを強調させていた。やはり胸元はかなりふくよかできて、なのに腰は細く、全体的にすらつとしたシルエツトが堪りません！ いやー、ご馳走様です！

が、刹那にその姿は消え、気付けば眼前に穏やかな微笑をたたえた彼女の姿が。

「そこっ……！」

俺の股間へ伸ばされる彼女のしなやかな手。思わず、悲鳴を上げてしまう。

「いやんっ馬鹿！ どこ触ってんのよエツチ！ だ、誰にも見せた事ないんだからね！ 勘違いしないでよ！」

と、触る直前で、どちらも動きがピタリと止まる。

微妙な空気の中………恐る恐る、エトワールが尋ねてきた。

「……え？ 今の、素なの？」

「や、ち、違う！ さっきのは俺の中の女性がちょっと目覚めただけ……！」

俺の素晴らしい理由を聞かず、エトワールは生暖かい微笑を浮かべて、こちらの肩をぽんぽんと叩いてくる。

「今度、スカート貸してあげるね」

「ちゃうねん……！ ホンマ、今の無しや！ そんな認識されても
うたら、もうお婿に行かれへんがな……」

「うんうん、大丈夫。大丈夫だよ？」

「やめてー！ その生暖かい目をヤメテええええつー！！」
実に間抜けな叫びが、悲しく街道に木霊した。

「何じゃ……。また、人が来るのか」

そう呟いて、安楽椅子に腰掛ける。

もう誰にも会いたくない。誰にも、関わりたくない。

だから……そつとしておいて。

「……消してやる」

白く細い手がゆがみ、青白い閃光を生んだ。

一瞬照らされたその顔は、白く……悲壮な顔をしていた。

「と言うわけで、やってまいりました。ここが現場の泉です」

小声でリポートしつつ、木陰に隠れて泉ではしゃぎあう女子グループと少年のグループを、それぞれ俺とエトワールは眺めていた。

「どうよ。この位置は見つからない上に、良く見えるんだぜ？」

「もうここに家を建てたいわ。はい、これお礼のパンツ」

ありがたく、妙に暖かいそれを受け取り、ポケットの中にしまつておく。え、さりげなく何やってんだって？ へへーん、羨ましいだろ。シルクの白だぜ？

しかし、やはりエメラキスカは女性の平均水準が高い。勿論、美人さだ。

エトワールみたいに抜群の美少女とまでいかずとも、結構可愛い子や綺麗な人は多い。水を掛け合い、甲高い声ではしゃいでいる娘も、そこそこのレベルだ。

少年達の方は、やんちゃ盛りらしい。流石にシヨタコンではないらしく、エトワールはいつもの穏やかな笑みを浮かべて、鼻血を滝のように流していた。……ごめん、ストライクゾーンみたいだったよ。

「なぜかしら、この胸の高鳴り……」

「やめとけ、犯罪だから」

「でも、青い果実から美味しく育てるのは憧れじゃない？」

「……お前、天才だな！」

これからはそんなことも考えて視野を広げようと決めた 刹那
だ。

突如、雷雲が群れてくる。キャツキャウフフ(?)とはしゃいでいる、一般人の下へ

魔力の気配を感じ取った俺は、エトワールが気付くよりも先に精神を集中させた。

「キルシュ！」

「おう！ 流れ、弾け。展開するは壮麗たる蒼……清き天空の雨傘！」

雲の範囲に合わせる事で、中級規模の魔術を使わざるを得なかった。詠唱が長いのも、中級であるが故。

そこそこしんどいが、ここで女性達を餌食にしてしまう方がよっぽど辛い！

電気は水を通すと言われているので、一見ミステイクに見える。

が、それは水の中にある物質に電撃が走るだけ。水の純度を高め

俗に清水と呼ばれるレベルにすると、雷を弾けるのだ。それも含め、中級でなくてはならなかった。

そして、展開したのは水の膜。ドーム状に広がって、それが泉全体を覆いつくした刹那、巨大な雷光が頂点へと落ちていく。

その衝撃はかなりのもので、展開していた水を集めても、あの雷には及ばないだろう。根本的に、注いだ魔力の絶対量が違う。

「くそっ……！！ こうなりや……！！」

古代の文献で見つけて、思わず燃やしてしまった最悪な魔術。ア
レを放つしかないか。

「紡ぎ、化せ。展開するは堂々たる緑。あらゆるものを風化させ、
侵食せよ！」

風化の呪文。これは、鉄や生命でさえも奪いつくす、黒い風。

「悪魔が払う漆黒の破風！」

豪っ！ と黒い風が生じ、雷撃とぶつかる。

雷は粒子の集まりらしい。魔術では、それを魔素で作れるらしい
のだが、雷は才能がなかったので『マジックシェイプ』無しでの生
成は不可能である。

ともあれ、俺が放った最悪の古代魔術は粒子をも風化させ、雷を
奪いつくして霧散した。

「……凄いわね。つて、大丈夫？」

「ああ、心配すんな……」

呼吸が荒くなり、頭痛が酷くなる。古代魔術のような強力なもの
を速攻で編み上げるのは至難の業だ。出来たとしても、精神力は愚
か、体力まで持っていられる。

特に、水の純度を高めるとか、炎の温度を変えるとか、オプショ
ンをつけると余計にしんどい。

はあはあ、とこちらの息を見て、エトワールは神妙に頷いた。

「発情、してるんだよね？」

「俺は病気が何かか！？ 年がら年中発情して……るかもしれんが、
魔術を使った後、性的興奮なんかするか！ それなら俺の股間は、
毎時エレクトオブザーバーだっつーの！」

「でも、魔術師の次は賢者でしょ？」

「その賢者じゃねえよ！ ……ああ、つたく！ それよりも、彼女
等を避難させてくれ。ちよいと俺を休憩させてくれよ……」

「うん、行ってくる」

「四十秒で支度しな」

その背に声を掛けつつ、木陰に寄りかかる。やはり、無茶が過ぎ

たよつだ。これからは、もう少しゆつくり詠唱しよう。

と、腹の虫が鳴る。そういえば、彼女と別れてその翌日まで、何も食べていない。

「……習慣、か」

思い出すのは、魔術の修練。

空腹でイメージが出来ないケースが絶対にならないように、修行の際は常に空腹で行うのがキルシュの修行法だった。おかげで、今も昔も食が細い。

だから、空腹でも戦える。ただ……エネルギーが切れると同時に、倒れてしまうが。

「……よし」

呼吸が整い、頭痛も治まった。

エトワールがいないうちに、キルシュは魔力の発生源を辿る。

先程の雷雲は、魔力の糸を介して魔方阵に魔力を伝達していた。

確かに出来るが……現実的ではない。超常的な魔術の更に行く、神技とも呼べそうなものだろう。

使えるような人間は、人間の含有できる魔力を超えている。魔族のハーフやら、高位な魔族。例えば、ヴァンパイアロードでも、それは不可能。魔力が足らな過ぎる。ドラゴンが人化すれば可能かもしれないが、それでもレッド、ブラック、ホワイトと言った上種族でないと出来ないだろう。

『マジックシエイプ』それを介せば可能だが、糸状に変化するものなんて、使えない。見慣れているし、糸に勢いを持たせるのは難しい。

可能性として考えられるのは二つ。

一つは、もう凄まじい魔力を持っている事。俗に言う、力技である。魔力に物を言わせて、魔方阵を遠くに展開し、糸ではなく魔素の本流として細い道を作り、魔方阵と繋げる。こうすれば、音声で魔力を届けるまでもなく、発動可能だ。ただ、眩暈がするほどの魔力が要る。

もう一つは、『マジックシェイプ』に似た道具で、魔術に指向性を持たせる『魔術指揮棒』^{マジックタクト} 要は杖だ。

魔術師が使う杖は、魔力を伝達しやすい白金などで出来た物で、物によっては魔力を秘めた宝石 魔石を先端に頂くものがある。

杖の先から放射するイメージなら、ブレもなく、また無駄な魔力も必要なく、そして魔石の補助により、容易になるのだ。まあ、こちらも正規に購入するとなると、国の許可証やら貴族の屋敷が三つ買えるような金額やら……違う意味で眩暈のしそうな条件が山積み。そんなヤツが相手なら、エトワールは向かない。

魔力を所有していない人物に対して、魔力はダイレクトに影響を及ぼす。

十の魔力で、例えば俺が魔術を受けたとする。俺の持っている十の魔力には敵わず、結果、ダメージなし。

だが、魔力ゼロの彼女が当たれば 十のダメージがそのまま通る。危険なのだ。

特に雷を使うなら、かすただけでも致命傷だ。反対に、魔力を持つ相手にはそうそう効くようなものではない。魔素の粒子による攻撃だからだ。

光、雷、炎、風、水、土、金属、闇の順番に、魔力を持たないものに有効である。魔素を固め、変換するのに時間が掛かる土や金属、闇は、他の才能がない限りはあまり使用されない。

なーんて語っては見たが、結局は力技で何とかなる。雷の魔術だろが、圧倒する魔力さえあれば、どんな相手も潰せるのだから。

「……それに、秘策もあるしな」

笑みを浮かべつつ、目的の場所まで歩くキルシュ。

その後を追う、騎士達の影に気付く事無く。

一章 魔の森のロリババア 前編（後書き）

御感想、ありがとうございます。

突っ込みどころも満載な勇者ですが、優しいこの男をどうか見守ってやってください。

一章 魔の森のロリババア 後編（前書き）

注意。本小説で行われている行為は、絶対に真似しないで下さい。
犯罪です。

一章 魔の森のロリババア 後編

誰にも踏み込んで欲しくない領域を、誰もが持っている。

それは物理的な空間だったり、心理的な場所だったり。個人個人において違うだろう。

人は無意識のうちに、そこから人を遠ざける。よほど親しい人物でないと、踏み込んでもどうにもならず、気まぜくなるのだし。

私はそれが人一倍に広くなったと思う。だから、誰にも……もう居場所を奪わないで欲しい。

が、そんな願いは知らんとはばかりに
「おっじゃまっしまーす！」

何故か窓から侵入してきた優男は、今までの概念や私の気持ち、スタイリッシュに粉碎していった。

窓破壊まで、五十秒前の話。

俺は眼前のドアを見つめ、顎を撫でた。

（うっん、着替えを覗くべきだろうか。いや、相手は遠隔で魔術を放てる相手だ。気配を消しているとは言え、何となく気付いているだろうな）

そんな事を考えつつ、他に出入りできる場所を遠目で探していく。正面に入り口一つ。後は、窓が四つと、なんとシンプルな建物だろう。驚きである。

（堂々と正面から突入するのは、馬鹿のやることだな。友好的に、且つ俺が馬鹿だとカテゴライズされないようにするには……！）

大きめの窓を見て、俺は助走をつけつつ、音もなく跳んだ。

「スタイリッシュ おっじゃまっしまーす！」

言いつつ、窓から進入する。え、その結論はおかしい？ うるせえ！ ロリババアを前にして俺の興奮は最高潮なんだよ！ 少しく

らい適 当でもいいじゃん！

窓を粉碎し、木の床に降り立つことに成功。流石は俺だ。

「な、何じゃお前……！」

深みのある高い声が、戸惑いを隠しきれずに揺れている。

彼女の方へと振り返りつつ、東洋のカブキ……だったか？ そんなポーズを真似つつ、見得を切ってみた。

「俺様、スタイリッシュに参上！」

「こら、動くてない！ 破片が散らばるだろう！」

「あ、サーセン……」

頭を下げて、丁寧にガラスを片付けていく童女を見 目を見張った。

魔術師限定だが、髪の色で大体才能は判別がつく。

俺は炎の才能が強いから紅系。それに水の青と、風の緑が混じって、くすんだピンクのような色合いになっている。

彼女は、薄緑掛かった白髪だった。光と雷を有しているらしいが、いやそんなことよりも……！

「綺麗だな、その髪！ ちょっと、もふらせてください！」

「な、なんじゃ！？ お、お前、ちょ、や、やめんか！ くすぐった……！？」

癖のあるふわふわした髪を手繰ってもふもふしてみる。うっーん、気持ちがいい。この艶と弾力、それに加えていい匂いがする！ 最高です！

しばらく堪能していたかったが、それは無茶らしい。

「この……っ！ 近付くなああああ ツー！」

「あばばばばばばばばばば つー？」

突如、叫びで発動させた電流に身を拘束される。

憤然と無い胸をそらして、少女はこちらを懨然と青い瞳で睥睨する。可愛い。

「フン。このまま焼かれるがよい。この電流、よもや耐え切れまい？」

「ぎ……」

「ぎ？ なんじゃ？ 辞世の句でもできたなら、聞いてやらんでも
」

「ぎ……ぎ ギインモチiiiiiiiiiiiiiiiiiiii

つ！！」

「な、ちよ……えええええええつ！？」

そう、秘策とは。

相手が女性 美女、美少女であるならば、妄想によって痛みを
快樂に変換できる。セルフ・M・スイッチである。

「はあっ、はあっ……！！ ロリ美少女に電流なんて、はあっ、はあ
っ……！！ いい……っ！！ すごくいっ！！」

「ちよ、よ、寄るでない！ 気色悪いぞ、お前え！」

電流がつよくなるけど、これはツンデレで言うツンなんだよね！
？ ビリデレとかわけわからんジャンルに萌えるお前らも、共感し
てくれるよな！

「フヒヒ……！！ 何で逃げるんだい？ 分かってるよ、これは君の
愛なんだろ？」

「何故そうなる！？ 全力全開で拒否しておるのが分からないのか！」

「その後、全力全開で愛してくれるんですね！ 分かります！」

「どういった脳構造をしとるのだお前はっ！」

「お前……！！？ やだ、そういえばいきなりシ・ン・ミ・ツ」

「ど……どっかへ行けええええええええ つ！！」

高速の魔弾。多分、光の弾だろ。一瞬で、しかも動揺した状態
から放たれたのにも拘らず、必殺の威力を誇っていると見た。

「流れ、軋め！ 流るる水の嫉妬心！」

彼女が叫ぶのとほぼ同時に完成した魔術を放つ。

水を通った光は屈折し、俺から僅かに外れ、奥の窓を吹っ飛ばし
て消えた。危ない危ない。

が、彼女は本気の殺意を以って、こちらを睨みつけてくる。まる
で、拗ねた幼子のように。

「先程の魔術を防いだのは、お前か」

「凄いつしょ!?　これが俺の勇者たる由縁だぜ!」

「……警告する。どこかへ行って、もう関わらないでくれ」

無視かい。泣いちゃうぞ、寂しいし。

「何でそんな事言うんだ?　つれないぜ。こーんな暗い森にいるから、考え捻じ曲がっちゃうんだよ」

「そうか。なら、そんな女と関わるな。頼むから……一人にしてくれ」

重い、雰囲気だ。

何が彼女をそうさせているのかは分からないが、何か根深いものを感じる。人生経験で言えば、トラウマに近い部類の拒絶に似ていた。

「私は……五百歳になる」

「え?　見えねえよ」

「当然だ。……私の中の魔力が強すぎて制御できず、成長が止まっているのだから」

自嘲的な笑みを浮かべ、彼女はゆっくりと椅子に腰掛けた。

「私は貧しい家庭に生まれて、ぬくぬくと育った。この年齢まで、魔術の才がなかったただの少女だった。ある日の事だったよ。突然村を襲った凄まじい闇の魔力にあてられ、私の中に眠っていた魔力が起きてしまったんだ」

魔力を持つものは、先天的か後天的かに分かれる。

魔術師の家に生まれれば大抵は魔力を持ち、極まれに一般家庭からも誕生する事がある。

が、後天的は、魔力の才を持ち、何らかの形で魔力が呼び覚まされたりする突発型だ。専門知識も何も持たない状態で放り出され、暴走した例も少なくない。

ましてや、闇の魔力だ。何らかの影響を、人体に与えたに違いない。

「……私はな、人の身であると同時に、その闇の魔力に中てられ、

化け物の姿として認識される事になったのだよ」

「俺には普通に見えるけど？」

「そうだな。魔力を持つているからだろう。……それ以外は、思わず石から剣、大砲まで持ち出されるほどの、醜悪な化け物に見えるんだそうだ。呪い、だろうな」

やはり表情を変えず、淡々と彼女は言葉を紡いでいく。

「最初の村は追い出され、気持ち悪がられて誰にも近付いてもらえず、だったら破壊しようとした結果、生き残った魔術師の間で魔女と呼ばれるようになった。……それだけだ。一般人には風に音声を乗せて警告をしているが、入ってくるとなれば迎え撃たねば大きな騒ぎになる。もう、静かになりたいんだよ……」

そう語る彼女の瞳に、ランプの輝きが反射している。美しい、涙、悲しい、涙。

ずっと一人で、誰にもその苦しさを言えず、溜め込み……諦めていく。

届く場所に手が届かなくて。当たり前の幸せさえ、彼女は映してくれない。

「目にいく魔力を抑えて、見てみるといい」
言われたとおりにし……目を睜ってしまう。

闇が纏わり付き、狐だか熊だか分からないシルエットが彼女を覆っている。もはや人としての原型はなく、常闇を纏っているかのようだ。

彼女はそれを見て、悲しそうに目を伏せる。

「……そうだ。お前ももう行くといい。こんなおぞましい輩に付き合っても得がないだろう。ああそうだ、勇者なのだろう？ ならば、私を討て」

ある種の清々しい表情を浮かべ、彼女は手を広げて、迎え入れる仕草を試みる。

「お前になら、構わん。もう疲れた、休ませてくれ……」

立ち上がり、彼女はそっと目を閉じた。これは……好機？

「それじゃ……」

すかさず近寄り

その長袖のローブを一気に翻した。

「わーお！ レースの白！ 可愛いパンティーちゃんっ！」

彼女は顔に青筋を立てつつ、何かを必死に堪えているようなトーンで質問を投げ掛けてきた。

「何を……やっとなるんだ、お前は」

「何って？ 俺がここに来た目的だけど？」

「……経緯を話してみろ」

「ここに合法ロリがいるって言うから、パンツを拝み、出来れば頂戴しようかなあと……ぐふふ、いやらしいですな！ レースだなんて！」

「お・ま・え・はあ……！！」

「ほぶっ!？」

白い綺麗な足の膝を顔面に貰い、倒れてしまう。痛い。でも、僕、満足！

「勇者ではないのか!? ここで悪を挫くのが、勇者では」

「悪って、何だよ」

そう、腹が立つ。

「勇者が悪を挫くのは定番だわな。でもよ、悪ってなんだ？」

分からないのだ。正義とか悪とか、そんな観念が。

「例えば貧しい少年はパンを盗んだ。逃げ果せた少年は、貧しい子ども達にそれを分け与えた。子ども達から見れば少年は正義の英雄だし、パン屋から見ればつるし上げたい悪者だ。明確な基準なんてないし、それでいいんだよ」

「だが、私は魔女で……」

「処女なの？」

「い、言うな！ と言うか、何故知っておる！」

「まあまあ。呪いなんて、どこ吹く風さ！ きっと、風が解決してくれるだろうよ！」

飄々と受け流す俺に、とうとう怒ったのか、可愛い顔を吊り上げ

て、彼女はまくし立ててくる。

「お前は……！ お前はなんなんだ！ 私の過去を聞いた、醜い姿も見た！ なら、何故そうしてられる！」

「同情でもして欲しかったのか？」

「な、なんだと……？」

「ああつらいねー、大変だったねーとか何とか言っつて、抱き寄せてやれば満足だと？ ほざけよ、婆さん。俺は俺がしたいように行動してるんだ、アホ臭えんだよ」

「……それ以上言っつてみる！」

怒りの形相で、感情のままに膨大な魔力が型を為す。輝きは膨張して溢れ、勢いとなって家内をめちやくちゃにしていった。

「俺はな、目の前にいる女の子を口説くのが目的なんだよ！ 過去とか醜い姿だとか、そんなもんで混ぜっ返すな！」

「な、なに……？」

急に輝きがしほみ、間抜けな声を彼女は漏らす。

そこですかさず、ウインクを投げてみた。キラッ と。

「俺のハーレムにならないか！？ ぜつてえ、損はさせねえよ！」
堂々と言い放った俺を、何故だか彼女は呆けて眺めていた。

ふむ、ダメだったか。なら、最後にもう一度、あの白を目に焼き付けておこう。

「紡ぎ、払え。展開するは堂々たる緑。悪しき思いを風に寄せ、打ち上げる。天へと誘う破邪の清風！」

少しひんやりとした風が上昇気流となつて、思いつきり裾を持ち上げ、少し膨らんできている胸元辺りまで服をたくし上げた。うーん、絶景哉。

「いやー、ご馳走様です」

「……………ど……………ど……………！」

彼女の眩きによつて、緑色の輝きが目の前で収束し、

「どこかに行つてしまええええええええ

ッ……！」

「ありがとっございませあああああ

すっ……！」

叫びによつて放たれた魔術によつて、俺の体は砲弾のように家をぶち抜き、泉へと飛んでいったとき。

命令を受けていた騎士たちは、勇者キルシュが敗走したと見るなり、小さな家屋へ突入する。

「あ……っ!？」

そこにいた少女は、何かとてつもなく怯えていた。多分、あの変態勇者に何かされたのだろう、可哀想に。

「大丈夫かい？ あの変態勇者のことは、犬のフンでも踏んづけたと思ってくれればいいよ」

「フンだけにつて？ お前、全然笑えねえよアホか」

「そんな意図ねえよ!? つか、オヤジじゃねえ!」

「それこそ言つてねえし。そういやお前幾つだっけ?」

「三十五」

「オヤジじゃねえか! 何見栄張つてんだよ」

「あ、あの……」

「うん?」

「あなた、魔力は……」

変な事を聞くものだ。騎士は、魔力を持たない者がなれるのに。

魔術騎士は気取った格好をしているが、俺たち騎士は実戦的な鎧装備で臨む。昔の人間でなければ、一目で分かるというのに。

「そんなものないよ。そんなことより君も、こんなところにいちや危ないよ? 魔女が出るつて噂だからね。その魔女はいないみたいだけど、君……知ってる?」

「し、知らない……」

「そうか。それじゃあ、気をつけてね」

すぐにこの事を報告しなければ。

だが、気になったのは……あの少女が何故か、涙を流して、愛しそうに壊れた窓を見つめている事だった。

「ふーん、そんな事があつたんだー」

エトワールは話半分にその事を聞きつつ、ミートスパゲティをほおばっている。

ミートソースを指で拭つてやりながら、泉でびしょびしょになった服を着替えた俺が溜息を吐いた。勿論、恍惚の。

「あの白い肌に脚線、幼児体型つてのがまたツボだつたんだがなあ……」

「それにしても、同志を置いていくなんて……酷いわね」

「だから、奢つてんじゃんよ。ミートスパにコンソメスープ」

流石に俺も腹が減り、今はラーメンを食べている。何か異国の食べ物らしいが、美味しいので細かいことは気にしていない。気にしちやいけない。

「で、その間の力つてなんだつたの？」

「ああ……最近まで解除方法がなかった、呪いの魔術だよ。多分、閻属性の魔術に巻き込まれた時、その悪意が閻を寄り代に関係のないヤツにまで触れたんじゃないか？ 閻は、金属よりも質量があるからな」

「どうやったら解除できるの？」

「並の術者には出来ない芸当。根本から、その呪いを高純度の魔力で吹っ飛ばしてしまえばいいんだ。魔力が高い相手に対して、高純度な魔力を編んで放つつてのは、ほぼ確実に無力化されっからな。だから、限界にまで極めたものをぶつけるしかなくなる。水は集めると圧殺しちまうし、だから風を選んだわけ。清水の方が簡単だけどな」

「なるほどね。だから、泉に落ちたとき、動けなかつたんだ」

「そう言うこと」

黄色い麵を啜っていると、更にエトワールは尋ねてくる。

「ねえ、結局は骨折り損じゃない？」

「そうでもねえよ。俺は一人の女の子を導いた。それに……」

「それに？」

「ちゃんと、元も取ったからな！」

笑顔で俺が掲げたのは 純白のレースパンティー。

魔の森で悲鳴染みた少女の声が響いたらしいのだが、それはまた別の話である。

二章 村長の娘とブルードラゴン 前編（前書き）

魔術の設定と解釈が凄まじいのは、この話元が凄まじい魔術ものだった名残です。

二章 村長の娘とブルードラゴン 前編

「……姫への親書だあ？」

数日経ち、呼び出しに応じた途端にこれだよ！ 少しはねぎらうとか、そんな感じの優しさとかは見せてくれないのかねえ。

思いつつも、レターセットを受け取り、しかめっ面を作る。

不自然に感じたのか、王は首を傾げていた。

「どうしたのじゃ。お前は女の子大好きじゃろ、しかも姫じゃぞ？」

「あのなあ……。姫様とか一般の奴らは憧れてるけどよ、だいたい食っちゃ寝してるんだからデブでブスしかいねえんだよ」

「お前……国民の夢を粉々にぶっ潰しおってからに……」

「つーワケで、俺はノーサンキューな。ここの姫なら可愛いってメイドさんも言ってたし、会わせるよ」

「ダメじゃ。……ほれ」

「ん？」

一枚の絵を受け取った。写し絵と呼ばれる、姿をそのままにモノクロで写す魔法のような箱で作るらしい。

見たのは、絵本に出てきそうなメルヒエンな容姿の美少女である。髪がさらさらしてそうで、その上ロングで、ロリなのがいい感じのスタイルで、微笑が実に優しそうで……。バッチコイ！ ストライクですよ奥さん！

「これが姫様か！？ ちよ、どこの姫様だよ！」

「聖アバラスタ王国じゃ。兄と妹がおって、兄のメルクリーオは類まれなる弓の才能を持ち、彼女　メルキュールは光と癒しの魔術を使うぞ」

「んな事あどうでもいいんだよ！ 可愛いか！？ 年齢は！？ これはいつ撮影したモンだ！？ 三行で答える！」

「ごらんの通り可愛くて、

十四歳で、

一月前に取られた、

凄い写し絵じゃ」

「四行じゃねえか！ どこかで見たような答え方しやがって……！」
ともかく、羽根ペンを心のままに走らせる。不安定な場所で書類
を書くのは馴れているので、王も何も言わない。

手渡したそれを見て、王は硬直した。

「……読み上げて良いか？」

「おう」

「拝啓。当方、エメラキスカ勇者と任命されし、キルシュと名乗る
者。寡黙な王に代わり、私がペンを取らせて頂く事を先に御了承頂
きたい」

「いい感じだろ」

「それも驚いたが、これからが問題じゃ」

咳払いし、王は続きを無表情で読み上げていく。

「不躰ながら、単刀直入に申し上げますと、エメラキスカとの友好
条約を御検討願いたく思っております。願わくば、あくまで対等な
条件下において、互いの健勝を支援する形を。仮に承諾した前提と
して続けさせて頂きますが、条約締結の会議につきましては、そち
らの空いた時間で結構です。決まりましたら、早めに書をお届け願
いたい所存で御座います。色よい返事を、お待ちしております。…

…」

「拙いのか？」

「やれば出来るではないか！ 何故、この手紙の誠実さを普段の生
活に活かさなのだ！」

「馬ッ鹿野郎！ このギャップがいいんだろ！」

「いや、お前の言つとる事は微塵も理解できん！ そうやって真顔
でいれば、絶対にモテるはずなのじゃがな……」

「上っ面しか見てねえヤツを口説く気はないし、俺も本性を晒さな
いで口説く気はねえ。互いが互いに合意した上で、俺は口説くね。
それがルールだ」

「でも、やっている事はナンパじゃろう」
「まあな！」

これが俺の生き様よ！

と、王は仕込んであった二枚目の手紙を見つけたらしく、それを見て 噴出した。

「な、何じゃこれは！」

「いや、俺の率直な思い」

「私の白い思いを生まれたままのあなたへぶつきたい。そして、あなたと……合体したい！？ こんな文面があるか！ これは焼却処分するぞ！ と言つか気付いてよかったわい…… 確実に戦争になるじゃろ、これ」

「ハイハイ……」

不満を垂れながらも、俺は内心でガッツポーズを取る。それは困だ。

知らず、王は封筒にそれを入れ、控えていたメイドに渡した。計画通り……。

「んで、用ってこれだけ？」

「これからが本題じゃ」

「あー俺唐突に用事思い出したー。これから街中で日課をしなきゃならないんだー」

「まあ聞け。ある村で魔物による被害があつてだな」

「駐屯騎士にどうにかしてもらつてくれ！ 魔物討伐とかメンドソウで汗かきそうな労働はノーサンキュー！」

「……お前を農民にしたら半日で発狂しそうじゃな」

うん。俺、虫とか超嫌いだし。何アレ意味わかんない何で生きてんの馬鹿なの死ぬのアレが好きなのつななの？

「飛ぶ虫がさあ、嫌なんだよねえ。蜂とか、蛾とか。バツタとかマジで飛んでくるなって言いたいぜ」

「それだけなら良いじゃろうに。健気に生きておるのだぞ？」

「人間ってのはそれ以外の種族を受け入れられるほど、心が広くね

えよ。同じ人間同士で争ってんだからな。犬とかを友達とか抜かしてるヤツも、救われねえよ。餌を与えているって上からの立場で見ている限り、どう足掻いたって対等じゃないのにな。服を着せてあげる、何かをしてあげる、とか、自分が必要な存在なんだと自分に思い込ませてんだろ？ 無意識下でさ、保守的になっちまってる」

「……ドライじゃな」

「ありのままを言ってるんだ。んで、却下だ却下。騎士にやらせるって。それがあいつらを必要としてる理由で」

「ドラゴンが出たんじゃよ」

出掛かっていた軽い言葉が、止まってしまふ。

「色は？」

「……北の方から、ブルードラゴンがな」

「おおい！？ 何で悠長にしてんだ！？ 全国の騎士団呼び戻せよ

！ この国が最悪滅ぶぞ！」

ドラゴン種族は、色で強さが別けられている。

グリーン、アッシュ、イエロー、ホワイト、ブルー、ブラック、レッドの順番だ。最弱のグリーンドラゴンでさえ、国の騎士が束になって掛かり、ようやく倒せるくらい。幼生なら一つの部隊でも済むかも知れないレベルで、結果、ドラゴンは一人ではどう足掻いても勝てないのだ。

ブルードラゴンにおいては、その氷の吐息と氷に覆われた鱗が戦闘を困難にしている。防御力は氷さえ避ければ最弱で、ある意味ではグリーンドラゴンよりも弱い。総合的には光線を放つホワイトドラゴンよりも強い。

ぶっちゃけ、ムリ！ て言うか、逃げたい！

「やだやだ！ ドラゴンと戦うなんてやーだー！」

「駄々っ子かお前は！？ 国を捨てて逃げるわけにもいかんだろ！？」

「俺は逃げる！ アホ兄貴と違って、俺は命が惜しい！」

「……その村にはな、可憐な娘がおって、それは村長の娘なんじゃ

が

「ぐつ!? ……だ、だけどな、俺は……」

「その娘がまた、純情でなあ。十六歳とは思えないプロポーションでありながらも童顔で……。その子は村と共に心中する覚悟だそ
うなのじゃ。きっと、ドラゴンから村を救えば、惚れるじゃろうな
あ〜!」

「おいおい、ドラゴンが何だって? この超勇者キルシュ様に任せ
れば、一人でもちよちよいのちよいさ! ハーツハツハツハ!」

王も、城のメイドも、衛兵も、何故だかこちらを驚いた目で見て
いた。うん、今までギャグで受けていたんだろって思ってたんだろ
うね。だけど俺はいつも本気だぜ!

「……頼んだワシが言うのもなんじゃが、騎士団を付けるぞ? そ
れから、魔法書もいるじゃろう」

「本だけでいいぜ。……別に、炎を使いたくなかっただけだしさ」
王が用意させた本の中から、紅い装丁の本を一冊手に取る。

魔法 魔術とは違う、強力無比な代物だ。

古代魔術よりも、ある種絶対的な力を持つもの。これを魔法書な
しで使う、魔法使いが昔に存在していたらしいのだが、今では考え
られない事だ。

この魔法は『聖炎・メギドフレイム』が記されている。これを触
媒にして詠唱し、後は魔術と変わらない。

扱うには資格が要る。魔術の素養は勿論、何か特別なものがある
らしいのだ。それは心だとか言うが、結局のところ、判明していな
い。

個人的な説だが、多分書物に魔法ごと封印された精霊が認められた者
だけしか、行使できないのだろう。いや、多分だが。

「……なあ、追い払うだけじゃダメか?」

「わが国に被害が及ばなければ、どうでもよい。お前の好きにしろ。
村はここより北にある隠れ里だ」

「サンキュ」

ウインクを王へ投げ掛け、窓を破壊して飛び立つ。

「……何故、壊したのじゃ」

あてつけだよバーカ。

話をすると、エトワールも付いて来てくれる事になった。ドラゴンが見たいとか何とか言っていたが、軽いなオイ。

「ドラゴンだぞ、ドラゴン！ ビビれっつーの」

「だって、所詮、硬くて大きいだけの爬虫類でしょ？ 飛ぶけどね止める！ ファンタジーの難敵をそんな風に言うのはやめる！

台無しだろ色々と！

「プレスだって半端じゃないしな。そんなドレスでいくのか？」

「今日のドレスは紅いでしょ？」

「三倍早く動けそうだし、そうで当たらなけりやどつと言っ事はないんだろ？」

「そうそう。それに、いざとなったら守ってくれるでしょ？ ね、勇者様？」

悪戯っぽく微笑んでくるエトワールに笑みを返し、街道を歩いていく。

北の村は知っている。他との交流は拒んでいるが、唯一、エメラキスカとの交通に依じている要所だ。ドラゴンが出たなら村は破棄すべきだが、そう言うわけにも行かないらしい。

かなりの傾斜を登った先にあり、高原に加えて天然の牧草地帯でもある。普段は、馬などを飼っている女の子達がいるのだが、流石に今は人っ子一人いなかった。

「……許せねえな」

「やっぱり、勇者として？」

「一人の男として……牧場ガールの属性も抑えておきたいのに！ 畜生、ドラゴンめ！」

「ああ、やっぱり……」

ちよつと強い風に吹かれて民族衣装を翻す可愛らしい女の子達の姿が見れないだなんて！ しかも、おおらかで元気な子が多くて、お気に入りスポットだったのに！

ああ、何か腹立ってきた。

「魔法でここら一带灰にしてやるうか……」

「そもそも、魔法つてどんなに威力があるの？」

「……んじゃ、見せといてやるよ。はぁーあ、ちよちよいのちよいなつと！」

適当に呪文を口ずさみ、水の結界を張る。周りの光を曲げる為、内部で起きている事象は見えない。

「斬ってみるよ」

頷き、エトワールはとんつ、と駆け出す。

何か煌いたかのような一閃の銀光が奔り、結界を真つ二つに切り裂いたようにもみえた。

しかし、結局は刃が水で阻まれ、動けなくなっている。剣を抜いたエトワールは、不思議そうに結界を眺めていた。

「凄いわ、これ。水が重くて、剣が進まない。相当の水圧ね」

「まあ、この壁を今から炎で壊す。水は炎を消すんで、属性的には最悪だが……」

魔法書を手に取り、魔力を本に集める。

すると、足元に魔法陣が出現し、紅い燐光を立ち上らせる。目に映える深紅のそれが鮮烈に輝き、その美しさにエトワールは声を失っているようだった。

極度の集中状態に到り、キルシュは半眼のまま詠唱を唱えていく。「黙示録に記された、鮮烈なる紅よ。我という法を害す輩へ、裁きの炎を召したまえ。願わくば、どうか安らかに」

その輝きが払われた手のひらに収束していくのを確認して、それを握りつぶした。

「……やめた、アホらし」

水の結界も弾けて、消えてしまう。

エトワールは文句を言おうとして、思わず口を閉ざしてしまった。普段、すけべな妄想で緩んでいた俺の表情が、やたら渋く歪んでいたからなのだろう。

「……お腹、痛いのか？」

「そんな間抜けな表情に見えたかい！？　メツチャシリアスだったじゃん！　台無しだよ、今の一言で全部！」

「ごめんなさい。でも……本当に、お腹が痛そうだったから」

「そんなしゅんとされると下手に怒れねえし！　……あーったく、行くぜ！　さっさとドラゴンにや、出てってもらおう！」

ずかずかと俺は街道に沿って高原を進んでいく。

追って、エトワールは横に並び、更に質問を重ねた。

「結局、本気を出せば、魔法ってどれくらいまで威力が上がるの？」

「ん……そもそも、種類が二つあるんだよ。一つは、魔力耐久値の高い連中を殺していた魔法。魔法によっちゃ、戦士達にはまるで効果がないのもあるんだ」

「え？」

「要は精神的なものなのさ。例えば、思い込みで、何も無いところで火傷をするって話を聞いた事があるか？」

「ええ。冷たい水の入ったやかんを触って、火傷を起こした話ね」

「その強化版だ。魔力が高いのを逆手に取ったもので、対魔術師の兵器。魔術師はイメージや魔力で術の威力やらが変わるんだ。魔法によって強力な幻想を見せられ、それが自分の体に打ち込められるイメージがリアルなほど、自分は余計に傷つく。中には、魔力を握りつぶすイメージがあって、それをまともに見ちまったら……もう、魔術師でいられない。つまり、死ぬんだ。魔術師を裁く法の書って意味で、魔法書　それを縮めて魔法ってするのが一つ」

二本立てていた指を、一つ折り曲げる。

「もう一つは、対魔物用で純粹に威力を特化した代物だ。これがそれに当たるな。人間には耐えられない魔力の行使を、書物が手助けしてくれる。だから、通常では考えられないほどの威力が出せる。」

武器で言うなら、大砲みたいなもんだ。魔術を超える存在として、魔砲って言葉が出てさ。めんどくさいからって、魔法に一括統合されたわけ。正式には、これは魔砲書と言う事になる」

「……さっぱり分からない事が分かったわ」

「要するに、俺は今、炎の大砲を持つてるってわけ。それこそ、あの村が一瞬で消し炭になるレベルのな」

扱う人間の魔力次第だが、俺の炎の才能を持ってすれば、城くらいは一撃だ。それだけに、駄々長い詠唱に加え、莫大な魔力を持つていかれる。二発も撃てば、もう魔力は空になるだろう。実は、俺はそんなに魔力があるわけではない。コントロールを極め、無駄なく使っているだけに過ぎない。

「んじゃま、行ってみっか！」

「そうね」

意気揚々と、無理やりテンションを上げつつ、その村へと入っていくのだった。

が、そこには凄まじい光景があった。

「頑張つて、ドラゴンを追い払きましょうー！」

「おおーっ！！」

村人達が、精一杯の武装をして、集まっていた。

防寒具の上から軽鎧を纏う何人ががいて、槍や斧、農耕具を手に、一人の少女の下へ集まっていた。

「おお……」

「凄いわね。ドラゴンにあの人数で立ち向かおうなんて……」

「いいおっぱいだな、素晴らしい……」

「ああ、そっちな。確かに、大きいわ」

あれが噂に聞いた村長の娘だろう。ダークブラウンのロングヘアに、可愛らしい顔、低い背に似つかわしくないプロポーションが危なげな魅力を放っている。

うん、ストレートに言おう。メッチャタイプです。

「ねえねえその彼女〜！ ドラゴンなんかやめて、俺と愛の狩り

に行かないか〜い？」

「えっ!？」

全員が いや、特に男からの殺気が殺到する。見つめちゃいやん!

「あの……もしかして、勇者様ですか？」

「そそ。あー、そのブ男諸君。これから俺の言う事に従ってくれ」

「ああ、っ!？ 勇者だが、貴様はよそ者だろう! 誰が貴様などに従うか!」

「そうだ、我らには誇り高き使命が」

「あそーれ!」

その一言で、急に上昇気流が発生し、ぽかんとしていた村長の娘さんのスカートが持ち上がる。

気付いて必死に抑えるも、時既に遅し。普通の水色だったな。横の端の結び目がエツチで堪りません。

呆然としていた男衆だったが、急に色めき立ち、俺の前へと喜色満点の笑みで集まってきた。うんうん、人類皆スケベ! スケベは全国共通概念だねえ〜! そう思わないかい? お前も!

「勇者様だ! 勇者様を御崇めしろ!」

「素晴らしい! 流石は勇者様だ! 従うしかあるまい!」

「ちよ、ええええっ!？ み、みなさん!？ ど、どうしたんですか急に!？」

欲に忠実で実に素晴らしい方々だ。憧れだった分、見れた物の価値も高いのだろう。

「勇者様! お、おいらはもつと上のほうが見たいんだ……!」

「馬鹿野郎! これを見る!」

再び巻き起こる上昇気流。それを恥ずかしがりながもスカートを抑える娘さん。

「恥ずかしがりながら健気に隠そうとするのがいいんだろ! しかも、事実ギリギリ見えてるところがグウ〜ッド・イナアフツ〜!パンモ口は違う、パンチラが見てえんだよッ! そうだろ!？」

全員に電撃が奔っていたようだ。中には妻帯者もいるらしく、奥さんからぶん殴られていたが、それでもこちらへの尊敬の眼差しが集まってくる。

「ゆ、勇者様……！ お、おいら間違ってたよ！」

「どうか、どうか私達にその極意をお教え下さい！」

「殊勝だな、嫌いじゃないぜ。あのな、男ならベッドの上で、彼女にスカートをたくし上げさせるのが最高なんだ。こう、潤んだ瞳で……恥ずかしさと男への好意の狭間で揺れてるってのがな、またミソなんだよ。で……」

素晴らしいエロ説法を行い、男達全員を手中に収める間、エトワールはペタリと座り込んでしまった村長の娘さんに声を掛けていた。「彼ね、悪い人じゃないの。でも、ビックリしたでしょ？」

「え、ええ。村の人が、あんなに他所の人を嫌ってたのに……勇者様の人徳なんですな！」

「……貴女、純朴ねえ」

目をキラキラさせて、キルシュを見る瞳。それは『そんけーのまなざし』そのものである。

「勇者様なんて、初めて見ました！」

「あれ、この村にもナンパしに行ってたんじゃない……？」

「……ああ！？ そう言えばあの人、前に来てました！ すっごい真面目な人なんですよ！ この村とエメラキスカとの交流があるのも、彼のおかげなんです！ 彼とお爺様が仲良くならなかつたら、絶対にムリでしたもの。そっかあ、勇者様だったんだあ……！！」

「嘘！？ 彼が真面目だったら、世界人類皆真面目でしょ」

「ホントですよ！ あんなにチャラいのが嫌いで頑なだったお爺様が、何故かすっごく機嫌を良くしていたんです！ 『あやつほどの理解者はそうおらん』と言って、鼻歌まで歌っていたんですよ！？」「……何の理解者か、教えてもらった？」

「いえ。お前にはまだ早い、とか言っていましたけど……」

「あー……なるほど」

前屈みになりつつある男達を眺めながら、エトワールは仕方なさそうに溜息を吐いた。

二章 村長の娘とブルードラゴン 後編(前書き)

シリアスじゃん！ とかいいつつ、シリアスになってない。
ようやく冒険が始まりそうで、まだ始まらない。

二章 村長の娘とブルードラゴン 後編

「諸君、いいか？ この伝統衣装の属性を守るために、一時的に避難しておくんだ！ ドラゴンは俺が何とかする」

『はい！ 勇者様！』

「すぐに戻るとは思うが、もしも時は王に俺の名前を出してくれ。然る処置はしてくれるはずだ」

「……お、俺も、やっぱり一緒に……！」

「馬ッ鹿野郎、お前が死んだら……その後ろの子に、何て言えばいいかわかんねえし、恋する乙女を口説く事あしねえよ。……彼女に笑顔を作ってやれ」

「は……はい……はいッ！ 勇者キルシュ様！！ 絶対、戻ってきてくださいね！ 気絶している村長共々、お待ちしております！」
感極まって涙を流す者や、悔しそうに齒噛みしつつこちらを見送ってくる者で草原はむさくるしい相貌だ。いや、女性のほうが多いのだが、何故か微妙な視線を向けられている。何で？

「おーい、エトワール！ 行くぜー？」

「待つてキルシュ。この子も連れて行くわ」

と、そこにいたのは村長の娘 確か、メロウと言ったか。

「おいおいおい。こんな純情可憐なお嬢さんを戦場にまで引っ張ってくるな」

「あら、私だつて可憐よ？」

「そうだけどさあ……」

アンタ、俺より強いじゃん。

そんな言葉が続ける間に、メロウは頭を下げてきた。

「お願いします！ 私、何でもします！ お手伝いがしたいんです！」

「……なら、さ。シチューでも作って待つてくれよ。それと、宴の準備。出来れば、君の手で作った料理が食べたいんだ」

「え……?」

「ありや、帰りを迎えてくれる美少女つてのが、勇者にとっての一番の報酬だろ? 君はその役に一等相応しいんだぜ? それに、魔法でこつちに流れてきた弱い魔物を任せるんだし、男衆は疲れる。だから、そのサポートに回って欲しいんだ」

「……でも!」

あーあー、美少女に冷たくしたくはないんだけどなあ。

でも、ここで死なれるよりは……ましか。

「あーもう! 邪魔なんだっつもの! アンタがいて、戦闘に何のメリットがある?」

「そ、それは……」

「精々俺のテンションが上がるだけだが、俺は無力なんでね! アンタを守りながら戦うなんてヒロイックな事なんざ出来やしねえ! なんせ勇者(笑)だからな! ハッキリ言えば、アンタの好意は邪魔で、酷く鬱陶しいんだよ!」

「……………っ!?!」

「無能なら無能らしく、指をくわえて待つてりゃいいんだよ! ……」

…あー、アホくせえ」

「ずかずかと大股で進んでいく。あんなに、シヨックで歪んだ顔なんて……しかも、俺がそうさせたなんて、見たくない。心が痛むのは、俺が弱いからだ。」

守れるほどの余裕があればよかったのだが、そう言うわけにも行かない。ホントはエトワールにだって付いて来て欲しくはなかったが、剣士無しでドラゴンに向かうのは無謀。

(兄貴みたいじゃ、いかな……)

何でも一人ではこなせない。だから、俺は勇者じゃないのだ。

エトワールはしばらくその場に残っていた。

泣いている村長の娘と、それを励ましている女性陣の話が、酷く

……頭にきたから。

「ほら、メロウ。泣かないで！ あんな変態の言う事なんて、気にしちゃだめよ！」

「そうよ！ それに、あんなのがドラゴンなんて倒せるわけないじゃない！ 私達も行くわよ！」

が、男性陣がそれを引き止める。

「止めとけて！ あの人が何で僕らを止めたのか、わかんないのかよ！」

「どうせオーバーに言ってるだけでしょ！ それに、あんたらだつてスケベ話に花咲かせてたじゃない！ 気持ち悪いわね！」

「じゃあ、あの方が死んでいいのかよ！」

「当たり前よ！ 勇者つてのは、国のために死ぬモンでしょ！ だから、あんなヤツも死んで当せ」

堪えきれずに、エトワールはその女の顔面を殴っていた。軽く、五、六メートルは吹っ飛び、辛うじて気絶はしなかったらしい。起き上がっていた。

周囲の女性が敵意の視線を向けてくるが、全員眼光で捻じ伏せる。「こんなのが避けれないのね。見えもしなかったでしょ？ 装備も貧弱、脳も貧弱、身体能力はもつと貧弱……そんな連中が三十人集まったつて、ドラゴンは愚か、私にだつて勝てないわね」

「そんなのありえないわよ！ なんなら」
言った女を蹴り上げて、空中に打ち上げた。他の連中が抱きとめるのを確認して、続ける。

「不意打ちが卑怯だとか言うつもりだろうけど、魔物が待ってくれるかしら？ 攻撃する前に攻撃しますよーなんて間抜けな事、言わないでしょ？ ドラゴンはね、そんな次元を超えてるの。不意打ちなんて当たり前よ？ そうしなきゃ勝てないもの」

「……じゃあ、アンタなら勝てるの？」

「ムリね。グリーンは倒したけど、あれだつて名のある傭兵と三十名の騎士アタックチームでようやくだもの」

「なら、あんなヤツが」

「でも、貴女より顔も良いし、貴女よりずっと強い。不細工って、心まで醜くなるものなのね。一つ勉強になったわ」

エトワールは、涼しい顔をして、悪口を言っていた全員を殴り倒していく。

「……なんであんなに彼が開けつぷろげか、知ってる？ 本当の自分を晒して、知って欲しいからよ。自分の本性をさらけ出すのって怖いよね。受け入れてくれなかったら？ 周りから弾かれたら？ そのリスクが目先にいつちゃう。当然、人と違うから……今みたいに弾かれるわ。でもね、いい事もあるのよ」

残った人物達に、エトワールは優しく微笑んだ。

「私が本当の自分を晒しても……受け止めてくれるんだから。私って、可愛い男の子やイケメンの下半身を見るのが好きな、変態だつても受け入れてくれたしね」

言って、彼女は駆けた。

話に夢中になっている際、可愛かった女子の下着を掠め取り、男子全員の服をさりげなく刻んでおいたのは、内緒だ。うほッ、いいバナナ！

「遅いぞ！ さては……シリアスな話してたな！ ここでシリアスは御法度だろ！ 何してんだよ！」

「大丈夫よ、最後にさりげなく混ぜ返したから。はい、お土産」

「お前最高だな！ マジ愛してる！ ほら、とっとと行くぜ！」
下着を手に、るるん気分に進んでいく。

まあ気合入れないと、初見で死んじゃうし。

ちなみに、ドラゴンと戦うのは初めてじゃない。何度かホワイトドラゴンの幼生を叩いた事がある。

「死ぬかもしれないわね……」

「なあに、イケメンってのは何でか早々死なねえんだよ。組み掴ま

れて自爆されたはずなのに生きてるイケメンだっているしな」

「それ何の話？」

「いや、友達同士だったんだけど、ふとした切っ掛けで敵同士になり、最後には手を取り合って平和を掴むって話。ありがちだろ？」

「そういえばそうね。そこで死ぬのは大抵、捨てられたヒロインとオッサンキャラだものね」

「しかも続編が作られたら、だいたいオッサンは復活するんだよな」
ストーリー展開では非常にありがちで、また熱い展開なのだが、明らかに死んだ人物を生き返らせると醒めるんだよな。難しい匙加減だ。

歩いていると、木で出来た床が高い建物が見えてくる。それがぼつぼつあり、畑に井戸と村のレベルとしてはそこその場所を通り過ぎた。

奥の山道を行くが、そこからは冷たい空気が流れ込んでくる。年中温暖なエメラキスカも高所であるここは涼しいが、これは平時の寒さではない。

「……寒いな。ちよいと待ってる」

白い息を確認して、魔術へと集中する。炎系魔術は使いたくないが、これは例外だ。

「灯し、纏え。……温む日差しの羽衣」

急に、周囲の温度が上がる。普通に活動するのに、適切な温度へと。

エトワールは顔を綻ばせ、手を振っていた。多分、動いても持続するのかどうか確かめたのだろう。

「どうよ？」

「うん、ありがとう。暖かいわ」

「……多少離れても効果はあるが、五十メートル離れたら俺からの魔力供給が途絶えるからな」

「難しいわね。……ドラゴンが幼生だと、助かるんだけど」

「まあ、魔力の少ない固体だと期待しておこうぜ」

刹那　真横に青い気体が猛スピードで流れていった。

咄嗟にエトワールが何かを差し出していたが、なんなのだろう。とりあえず、周りの樹木は一瞬で樹氷に変わってしまった。

「……一発喰らったら終わりだな。で、エトワール。お前、何出してたんだ？」

「バナナ。凍ったわね」

「釘でも打ってるお前は」

カチンコチンに凍ったバナナを満足そうに持っているエトワールに呆れつつ、風上に向けて手を向けた。

「紡ぎ、払え。展開するは堂々たる緑」

風の中級呪文を唱えつつ、気配を消す。

この森だ。気配が消えればこちらは見えない。が、それはこちらも同じ。森林伐採はしたくないのだが、どうせ永久凍土になるのだ。今ここで、消し飛ばす。

「　殺到する疾風の群！」

豪！　と魔方陣から殺到する突風。

それらばらばらに指向性を持たされ、しかしてそれは計算されつくしてある。つまり突風に加え、真空の刃を生む効果を得ているのだ。

刃を孕んだ風が辺りの木々を薙ぎ払うと、そこには傷つき、血を流す巨大なドラゴンの姿があった。身を伏せていたらしく、成る程、あれなら遠目でも見れないか。流石の知性である。

傷は　致命傷だ。しかも、痛みを強調するかのように、致命傷とは関係ない突傷が穿たれている。

「　……お前、喋れるか？」

「　………何だ、お前は」

「キエアアアシャベツタアアアア　　！！！」

「気持ちは分かるがその言い方は止める！　気持ち悪いわ！　……どうしてブルードラゴンがここにいるんだよ」

ドラゴンは知能も高い。グリーンにはムリだが、他の竜ならば可

能だろう。いや、知らんけど。

息を極力抑えているらしく、ドラゴンは巨躯を動かさず、少しだけ鼻から息を吐き出した。

『フン……娘を探している。人間に化けたのはいいが、魔力がない為に竜に戻れない出来損ないがな。が、娘は可愛いものだよ』

「そうか、分かった。動くなよ……？ 流れ、零れる。展開するは壮麗たる蒼。天より授かる一滴、雨となりて降り注げ。……降り滴るは癒しの涙！」

言い終えると、大きな一滴がブルードラゴンの上空に出現し、弾けて雨のようにその体へと雨を降らせた。

傷に触れた瞬間、急速に傷が癒えていく。ドラゴン特有の自己治癒力も相俟ってか、あっと言う間に大きな傷は見えなくなった。

『……何故、助ける？』

「バーカ。娘を助けようとする親を、殺すわけにやいくまい。目覚めも悪いしな。それに……人化した娘さんに興味もあるしな！」

『ほう……好色なヤツだな。いいだろう、我ら誇り高き魔族は感謝を忘れん。娘との交際を約束しよう。その代わり、自分で探し出せ。覚えていれば、一度会わせてくれ』

「よっしゃあ！ 人化ドラゴンちゃんとイチャイチャ！ しかも親公認なんて神的シチュエーションをゲッチュできるなんて！ 癒しの魔術習っててよかった〜！」

最高！ 超っ最高！ もうヤバいテンションが鰻登りで何言ってるか意味不明だけど最高！

なぞの踊りを披露していた俺を、急にエトワールが足払いで転ばせた。痛い。

文句を言おうとした刹那に、投げナイフが地面に突き立つ。危ないって、ああああああああああっ！？ さっき貰ったパンティーちゃんたちが串刺しに！？

て言うか、これ貴族御用達のノーブルナイフじゃん。誰だ、こんな実用性がなくてただ高いだけのものを使う馬鹿貴族は。

「おいおい、避けちゃうのかい？ そりゃあ困るなあ〜」
遠く見上げれば、影。

紳士服に金髪の、やけにニヤついた男。ひよる長いが、痩せているわけではなく、その実引き締まった体つきをしていた。

「御機嫌よう、勇者キルシュ。そして見慣れないお嬢さん。僕の狩りを邪魔しないでくれるかなあ？ 折角、この親の子どもを逃がしてあげたのに」

オカマのような声音。木の上でそう笑う男に、俺は憤りを覚えずにはいられない。

「テメエ……！ 何で男なんだよ！ そこはセクシーで危ない魅力があるお姉さんが来るシーンだろうが！ お呼びじゃねえんだよ！

俺のドキドキを返せ！」

「か、彼は何を言ってるんだい……？」

「そう言う人なのよ」

「で、その子どもをどこに逃がした？」

「ああ、聖アバラスタの方にね。後で追いかけて、じっくりいたぶって殺してやるんだ」

「あつそ。紡ぎ、裂け。駆け抜ける風の刃！」

瞬時に唱えた風の初級呪文だが、男の前で霧散する。結果か。

「どんな呪文でも、僕には届かない！ このマジックガードは、中級術すらも無効化する素晴らしい道具」

「んじゃ俺が貰おうか！」

跳んで、その呟きで魔術を発動させつつ、距離を詰める。

「な、何故……！？ 勇者に盗むスキルなんて……！？」

「俺さ、盗賊の心得持ちだから」

その時間は僅か二秒。急な加速でちよつと苦しいが、見事に掲げていた緑水晶を奪うことが出来た。忘れてたかい？ 俺も最初はネタだとばかり思ってたよ。

「んじゃま……そうだなあ、使いどころなかったし 使つとかないと、鈍るしな」

「え？」

「詠唱中略。二倍の魔力もっていけやああああ　　っ！！！」

詠唱破棄。身のうちにあるありったけの魔力を代償に、使用可能な魔術・魔法を無詠唱・無動作で発動できる荒業である。

発動したのは『聖炎・メギドフレイム』。断末魔さえ残してもらえず、彼の命はこの二十行目で散るのだった。

真っ白な輝きは男を飲み込んでも、嫌な匂い一つ発さない。まさに、清い炎。公平に誰もが焼失してしまう。

「……」

残り火を見て吐き気が来るが、堪えておく。もう馴れておくべきだ。火は、攻撃力のある魔術だ。使用不可能になるのは、困る。

「……火が、嫌いなのか？」

「ああ嫌いだね。……大ッ嫌いだ」

「大切な事だから？」

「二回言ったんだ。じゃな、ブルーママドラゴン。略してブルマ」

『ドラゴンが行方不明なんだが！？』

妙に的確な突込みを聞きながら、もやもやしつつ山を下る。……

ムラムラじゃないよ？

「ドラゴンを殺さなかった！？」

「ああ。そのまま北に帰って貰うことにした」

村人達の驚愕はさておいて、もう疲れた。最後の魔法が体にきている。もう寝転がりたいたい。

「魔物を倒すのがあんたの仕事でしょ！　しっかりしてくれない！？」

「あー？　信用してなかった癖して、良く言っぜ。俺を嫌ってたのに、いざとなったら泣きつくのか？　せめて虚勢張ってるよ、性格もブスじゃ救われねえな」

「なっ！？」

「そもそも、魔物を殺すつてのはどうなんだよ。魔物からみりゃ、俺らが化け物だ。……頭の悪いお前らでも、分かるだろ？ 話が通じるような魔物とは協力しといた方がいいんだよ」

「洗面を浮かべる村人達の間を縫って、村長とメロウが近寄ってくる。」

「敵かな雰囲気の下、村長は険しい顔のまま、一言だけ呟いてきた。『安心して、よいのじゃな？』」

「ああ。同志を死なせたくないしな。あの性格ブス共はともかく『そう言っつな。ある意味では、人間らしい。が、醜いのも然りじやがな』」

老人の眼光が村娘を射抜き、それだけで騒ぎ立てていた連中が静かになってしまった。流石の威光、やるじゃん爺さん。

「あ、あの……！」

「ん？」

差し出されたのは、美味しそうな匂いのするパン。そう言えば、石を積み上げた簡易の竈がある。

「シチューは道具がなかったの……パンにしました。あの……私たちのこと、あまり良く思っていないのに……何とかしてくださって、ありがとうございます！」

「礼を聞きつつ、差し出されたパンに銀の棒　いや、止めておこ
う。」

そのまま齧り付く。……薬草が風味を良くして、浮ついた甘さをしつかり抑えている。美味しくて、飽きの来ない味だ。

「ん、いいって事よ。それに、俺は全美少女及び美女達の味方だぜ？ 君みたいな子が助けを呼んでるなら、いつでも駆けつける。だって、ほら。俺、勇者だし？」

「適当な返事を返しつつ、とりあえず彼女の肩に手を置いて、さつと立ち去っていく。」

「ねえ……」

「ん？」

「何で、銀の棒を？」

「ああ……習慣だよ。信頼してねえヤツから受け取った物には、当てるようにしてる。毒で変色するんだよ、銀は」

完全に村人達が見えなくなつてから、草原を歩きつつもそう説明していく。

「それに、何であの人を殺したの？ 結構、容姿だけならいい感じだったのに」

「いや、魔法の見せ場なかつたし……」

「うわぁ……それだけの為に？」

「モチ、下着を台無しにして許せなかつたつてもある。全てが重なつて一つになり、それが冴えたやり方つてヤツになるんだよ」

「あの後、下着のお墓まで作つてたわね、流石に引いたけど。で、結局は無報酬なの？ あの娘の胸でも揉むのかと思つてたけど」

「報酬なら、貰つたよ。……あー、なんか限界くせえな。俺、しばらく寝るから。先行つてていいぞ？」

目蓋が重い上、これ以上歩けそうにない。

幸い、ブルードラゴンが去つた事で、温暖な陽気に恵まれている。草原に寝転がり、目を閉じた。

風は温かい草の匂いと共に、綺麗な花のような香りも運んでくれる。隣に寝転んだ、エトワールだろう。

「私も、付き合つわ。いい天気だしね」

「ああ。平和つてのが……勇者の報酬さ」

そんな彼のズボンを見て、エトワールは苦笑した。

「……見えてるわよ？」

「勇者様……あんなパンだけで、よかつたのでしょうか」

「いや、我が娘よ。ヤツは大変なものを盗んでいきおつた」

「え……?」

「……お前の、ブラジャーじゃ」

「え? ……あっ!？」

だって欲しかったんだもん! 僕、満足!

二章 村長の娘とブルードラゴン 後編（後書き）

G M E X P 欲しいよ……。ガンム、ガンム……。

個人的にXのディバイダー装備が好きです。ハモニカ砲が最高にカ
ッコいいなあ……。って、これファンタジーものだったよ。

ゼロ使が四期やるらしいですね。正統派はいいなあ、カッコいいし。
熱血書きたいよ熱血。

三章 傳い容姿のお姫様〜ウホッ、もあるよ〜 前編(前書き)

キーワード：ルズコピペ

三章 儂い容姿のお姫様〜ウホツ、もあるよ〜 前編

聖アバラストの王都、レイフォール。

王が崩御し、周りとの友好関係は白紙に戻っていた。

現在、どの国も静観している。国王である王家兄妹の兄　メルクリオの手腕を見たいが為の行動だろう。

そんな中で届いた、一通の親書。なんと、大国であるエメラキスからの書状だと言う。

「お兄様！　エメラキスカが友好条約を？」

「ああ、そうだ。メルキュール、これで少し肩の荷がおりそうだな」
儂い容姿をしているのだが、気が強く活発なメルキュールとは裏腹に、メルクリオは寡黙で鋭い印象の青年だった。

メルキュールは歌と癒しの魔術、持ち前の明るさで人気がある。対するメルクリオは年に似合わない風格と気品を備え、弓の腕はピカイチ。二人ともだが、少々天然ボケではあるものの、それもまた魅力の一つだろう。

今まさに、この国は彼らによって団結しようとしているのだ。

「で、何と書状を？」

玉座に座って書面を切れ目でさっと目を通し、メルクリオは静かに頷いた。

「……ふむ、向こうの勇者殿は中々礼儀に通じているな。見てみる」
読めば、丁寧な筆跡で字が描かれている。流れるような字体だが、雑ではなく、むしろ完成された絵画のような美しさと統一感を覚えた。

「字、綺麗ですね」

「ああ。書記に通じているとなると、かなり聡明な人物だろう。今までの筋肉ゴリラとは違ったタイプのようだな」

「き、筋肉ゴリラって……にしても、凄く丁寧ですね。若輩者であるこちらへ、上からでもなく、あくまでお願いする立場で……」

「好感が持てるな。ふむ、惚れそうだな」

「惚れちゃダメです男ですよ！」

「半分冗談だ」

「半分本気じゃないですか!?!」

「……む?」

二枚目の紙を見つけ、何食わぬ顔でそれを見た後、メルキユールにそれを手渡した。

「お前宛だ」

「え?」

書面を覗き込むと

『メルキユール! メルキユール! メルキユール! メルキユール! ううううわあああああああああああああああああああ
ん!!!!』

あああああ……ああ……あつあつー! あああああああ!
! メルキユールメルキユールメルキユールうううあわあああああ
!!!!』

ああクンカクンカ! クンカクンカ! スーハースーハ 』

「うわああああああああああああああああつ!?!」

思わず書類を投げ捨て、飛び退いてしまった。 何、この怪文

章!? ほんとに同じ人が書いたのコレ!? 見てられないよ!

その書類を拾いなおして、メルクリーオはやはり真顔で言っている。

「最後まで見る。これほどの思いが籠った手紙を粗末にする気か?」

「何か恐ろしいものしか感じないですお兄様! 思いが重いです禍

々しいです!」

「二度、同じ事を言う気はない。ほら」

「ううう……」

意を決して、再びその文章に目を通していく。

写し絵のメルキュールちゃんが僕を見てるぞ！　メルキュールちゃんが見てるぞ！　写し絵のメルキュールちゃんが見てるぞ！

脳内のメルキュールちゃんが僕に話しかけてるぞ！！　よかつた……世の中まだまだ捨てたモンじゃないんだねっ！

いやっほおおおおお！！　僕にはメルキュールちゃんがいる！！　やったよエトワール！！　（夜）ひとりのできるもん！！

あ、写し絵のメルキュールちゃんああああああああああ！！　いやああああああああ！！　董ええええええ！！

あっあんああっああんあメロウ様ああ！！　董ええええええ！！　エトワールうううううう！！！！　ドラゴンちゃんああん！！

うううううう！！　俺の想いよメルキュールへ届け！！　聖アバラスタのメルキュールへ届け！！

涙目になっているメルキュールへと、メルクリーオは首をかしげた。

「どうした？」

「やっぱりおかしいですよお兄様！」

「そうか？　一途な気持ちではないか。オレはその志にいたく感動したのだが」

どうやら本気らしく、何度も文面を見返しては、うんうんと頷いていた。ええええええええ！！　ここで天然振りを発揮ですかお兄様あああああっ！！？

「こんなの絶対おかしいよ！　……と言うかこの三章目って何ですか！？　そもそも発想が病気ですよ！　たまに出てくるエトワールって誰！？　写し絵をどこで手に入れたんですか！？　妄想が行き過ぎてますよ絶対！」

「む……？　なら、本人を呼べばいい。おい誰か！　エメラキスカのキルシュを国王権限でここに招く！　速達で書を出せ！」

「呼ぶの!？」

終には敬語も忘れ、メルキュールはただひたすらに混乱の坩堝に嵌るのだった。

「 紡ぎ、昇れ! 悪戯好きな桃色の風! 」

街中に吹き荒れる上昇気流。

スカートが現在流行している事もあってか、行きかう人々はスカートを押さえつつ、その下着を露にしてい

瞬時に色を数えつつ、いい感じのお尻を見ては顔を緩ませる俺。

いいねいいねえ! 最高だねえ!

「おっひよ〜! 今日白三十二、青と白のストライプのレア柄が三枚、バックプリントが二枚、ピンクが十二枚か……赤が減ったな」
そして俺の息子は、今日も元気で

メモに記載しつつ、高い建物から飛び降り、いつもの酒場に入る。来店に振り返ったのは、むさくるしい店主 ワーグナーと、超カワ綺麗なウエボンマスター エトワール。彼女の方は、笑みを浮かべて軽く手を振ってくれた。

「よう、エトワール! …… って、お前は飽きもせずにコンソメスープにパスタかよ。他のモン喰えよ」

「お前は食事の回数を増やせ。一日三回が目標だぞ」

「で、そう言うキルシュはなんにするの? 」

「んー……野菜スティックで」

「却下だ。鴨肉のローストサンドにジュリアンスープ。これくらい喰え」

「多いつて……」

言いつつもカウンターに腰掛け、エトワールと対談する。

「ドラゴンは帰ったろ? 」

「ええ、そうみたいね。村長の娘さん、何でかあなたの事を更に力ツコよく見てるみたいよ? 」

「当然！ この稀代のイケメンにして才覚溢れる術の使い手、ありとあらゆる心得を供えた勇者キルシュ様に向かって、当然過ぎる事を」

「私、帰るわね」

「出来心やつたんや見捨てんといてーなあ、後生やさかい！ な！？」

「その変な訛りはなんなの？」

「いや、咄嗟に出てくるんだけどさ……何なんだろうな？」

「私に聞かれても困るわね」

と、無造作に鴨のローストサンドに白の陶器カップに入ったジュリアンスープが置かれた。あ、ジュリアンスープってのは千切り野菜のスープで、薄いブイヨンと塩で味付けしたもんだぜ？ ブイヨンの代わりにコンソメでもいいけどな。

ローストサンドに手を伸ばし、齧る。サニーレタスとチーズに挟まれた鴨肉を噛むと、温かくコクのある肉汁が染み出してくる。美味い。

「どうだ、食べる楽しみを覚えやがれ」

「美味いんだけどさあ……なんつーか、腹が減ってた方が落ちつくつーか……」

「少し筋肉付けたほうが、カッコいいわ」

「やつべー急に食欲が沸いて来たぞ〜？ うん、美味え！」

単純だな、お前……とても言いたそうなワーグナーを無視し、食べしておく。筋肉筋肉、筋肉センサーシヨンだ！

そんな食事をしていると、急に誰かが来店。……って!?

「あ、国王じゃん！ どうしたんだよ」

「いつも思うが、フレンドリーじゃなお前……」

「何の用だ？ 俺は今、筋肉に目覚めつつあるんだ」

「そんなむさくるしい事をしておる場合ではないぞ！」

髭面をこちらに近づけ、何かの書類を手渡してくる。なんぞ？

「お前……一体何をしたのじゃ!?!」

「あー……？ 何々、『聖アバラスト王国は、勇者キルシユの登城を所望する。条約締結もついでに、彼へと一任させたい』」

「何かしたじやる！ あの失礼な手紙を後から送ったのか？」

「まさか！ 俺の思いを込めたラブ レターを内封しといたただけだ」

「それじゃああああああっ！！」

国王の悲鳴は、この狭い酒場で悲痛に響いていった。

「どんまいっ」

「可愛く言うでないわ！」

あ、聖アバラスト王国に行く事になりました。

三章 偉い容姿のお姫様〜ウホツ、もあるよ〜 前編（後書き）

相変わらずこのコピペは病気過ぎる。

パワポケ14！ 准が……准が攻略できちゃう！？ 現在、突撃甲子園を制覇し、札侍と魔球リーグを順次攻略中。てか、魔球リーグがムリゲー臭い件。ねえ、あの最後のヤツ勝てるの？ 何で1v3の必殺魔打法をバンバン使ってくるの？
楽しみながらやっております。三回、Ds投げた（笑）

三章 傳い容姿のお姫様くウホッ、もあるよーく 中編(前書き)

短め。

三章 儂い容姿のお姫様くウホツ、もあるよーく 中編

で、書を出してから、メルキユールは戦々恐々としていた。

かつて、これほどまでに恐怖した事があっただろうか。そのレベルにまで、彼女は怖がっている。

「お、お兄様……！」

「む？ どうした、腹が痛むのか！？ もしや産気づいたと！？」

「私まだ処女です！ って言わせないで下さい違いますよ！ 勇者様のことです！」

「そうか。残念ながら、時間が掛かっているらしいな」

「わ、私、街に行きたいなあ〜なんて思っているんですけど……」

「ダメだ。どうせ酒場で歌うだろう、あんな場所に行かせられるか」

「うっうっ……逃げたいだけなのに……」

何にでもものを言うのは、日頃の行いである。

それを身にシツカリと刻み込んだ瞬間、突如上の方にある窓ガラスが割れた。………なんで？

エトワールを引き寄せつつ、ロープでガラスの破片を払い、彼女を姫抱きするように着地する。流星は俺、スタイリツシュだ。

「いや〜、着いたな。どうだった、エトワール？ 快適な空の旅」

「素晴らしいけど二度と体験したくないわね」

「清々しいお世辞をありがとよ、帰りは馬車で帰ろうぜえ」

「嫌。歩いて帰りましょ？」

「体力の無い俺にそんな事を………って、ああ忘れてた。俺様、スタイリツシュに参上！」

「無駄に見得を切るのね。素敵よ？」

拍手を受け取りつつ、呆然とこちらを眺めている青い髪の二人へ、丁寧にお辞儀して見せた。

「御召集の命にて参上仕りました、キルシュです。不躰な参上にさぞご不快でしょうが、迅速にこの場へ赴く最適な手段として、空を駆けるを私は選び、実行致しました。今ここで数々の不敬を致した事を、どうかお許し頂きたい」

「ああ、構わん。迅速な対応、実に見事だった」

「いいの!？」

少女の方が驚いてい うわ、むっちゃ可愛い! 何々、妖精!? はああああ……こんなかわいい子がいるんだなあ、世の中広いぜ!

とは言え、もう少し猫被り。おちつけ、まだ慌てるような時間じゃない。

「つきましては、我が故郷であり守るべき国 エメラキスカと、ここ聖アバラスタとの繁栄に繋がる一歩として、友好条約を結びたいと王も、そして私も願っております。私に一任されると言うことであるならば、是非今すぐにでも賛同して頂きたい」

「受けよう。正直、そちらの申し出はありがたい。エメラキスカの属国も、これで表向きは友好的に接してくれるだろう」

「何かあれば、私にお申し付けください。友好条約を結ぶ以上、勇者の私にとってここは第二の故郷となり得る。そこをより良くする事に労力を惜しみませんし、または侵略せし者を捨て置けません」

毅然と言い放つ俺に、エトワールも少女も目を丸くしてる。あれ? ねえちよつと! 俺プライベートと仕事はキツチリする方だよ! え、嘘だろつて? フヒヒ、サーセンw

ともあれ、青年の質問は続く。ああ、コイツもやたらイケメンだな。耽美系のイケメンってヤツ。細い瞳と長く青い髪が、流麗なシルエットと相俟って女性に見える。

「貴君は何が秀でている? アピールポイントとウィークポイントを三つずつ、答えて頂こう」

「私は魔術、武器知識、またその二つの応用、対処を心得ております。ウィークポイントは内包魔力が賢者達に劣る、体力に欠ける、

私情で判断を下す傾向にある。以上です」

「心得た。オレはメルクリオ・アバस्ता。現在は王だが、若輩者だ。敬語はこれより不要、十年來の友のように話せ」

「……こいつ、結構な変人だな。恐らくは、既成概念にとらわれな
い。」

普通、敬語は不要と言ってくる輩は、口だけの事が多い。敬語を
使い、敬っている素振りをしないと、不快感を露にするのだ。

しかし、そう言うのは目でわかる。こちらの対応で、器でも測っ
ているのだろうか。……まあ、ただの天然だろうか。

「おうよ、俺はキルシュ。まあ、役に立つぜ？」

とりあえず、こちらも真っ向からぶつかってみる。男は度胸だ。

どうやら正解だったらしく、メルクリオは微笑を浮かべて、手
を差し出してきた。

「よろしく頼む、お前は信用できそうだ。オレの事はクリオで構わ
ない」

「ダサっ!? なんだよそれ! せめてメルにさせてくれ!」

「……ふむ、クリオはダサいか。なら、メルと呼んでくれ。それと、
ここの文献を自由に閲覧しても良い。興味があるだろ？」

「マジで!? いやあ、聖アバस्ताって言えば魔術書庫だしさ!

じゃあ今度、お勧めの魔術書を見繕ってくれよ!」

「ああ。それとオレも少々だが、魔術を使える。もっとも、威力の
低い金属と水だがな」

「威力が低くても、活用する方法はある。弓なら、金属との相性も
いいしな。今度、教えてやるよ」

「それは心強い。……どうした、メルキュール。そんなに呆けた表
情をして」

「あ、え……? あの……この、手紙を書いた人……ですよね?」

少女はそういって、俺の書いた素晴らしいラブ レターを渡して
くる。ん? 間の が無駄にイラっとくる? あのつまりらんど常系
がブレイクした理由である 様になんて事を! 許すん!

「おお、これは紛れも無く俺の書いたラブレター！ うーん、やっぱり君すんごく可愛いなあ……！ ……お兄様！」

「む？」

「妹さんを俺に下さい！」

「私への好感度ゼロで言ったあああああああつ！？ あのラブレターに相当の自信もってましたああああああつ！？」

「よし、ならば条件だ！」

「嘘でも戦争してみせるって気概を見せてほしかったですお兄様あつ！？」

ほうほう、思い切りのいい突っ込み……エトワールのシユールで的確な突込みとは違い、勢いがある。中々の逸材やないか、ホンマに芸達者やなあ。

そんな事を考えつつも、頬のニヤけが止まらない。うへへへへ、条件次第とかうへへへへ！

「うへへへへ！」

あ、声に出ちゃった。

「あ！？ ほ、ほらお兄様！ あれが彼の本性ですよ！ 妹を売るなんて、絶対にしないで下さいね！？」

「馬鹿な。ただ一人の可愛い妹を、売るわけが無い」

「お兄様……！」

「託すだけだ」

「結論変わってないですうううううううううう！？ ああもう何かもう……にゃあああああああ　　っ！？」

なんだか色々やりきれないのか、王城を飛び出していったメルキユール。溜まってんのかな、あの子。

「すまないな、妹はどうやら癩癩持ちらしい」

「違うと思うわ」

すかさずエトワールの突込みが入るも、メルクリーオは条件とやらを聞かせてくれる。

「その条件と言うのはだな、最近ある組織が肥大化しているんだ」

「それを潰せつてか？」

「察しがよくて助かる。彼らは様々な物を奪い、そしてやりたい放題だとか」

「……ちよつと、心揺れ動く俺だった。いや、山賊に組しようとか考えてないけどさあ、男ならちよつと興味あるじゃない？」

「まあ、この国から追い出す程度でいい。被害はそこそこ深刻だ、今後の事を考えると、少子化になるやもしれん」

「……ん？」

少子化……？ 山賊で何で少子化が発生する事態が起こりうるんだ？

山賊つてのは、基本的に真つ当に稼ぐ事を止め、略奪と支配による関係が続く組織だ。故に掟もあり、発展途上の組織は士気が高く仲間内のコミュニケーションも盛んで、中々手ごわい。なぜなら、犯罪と言うタイトロープと一緒に渡れる人物同士だから、強い信頼が無ければ成立しないわけで。下手をすればどっかの騎士団よりも強いかもしれない。

で、基本は女性も奪うのだが……もしや！

「女山賊ですか！？」

ヤツべえ、寝返りてえ！ 勇者なんてクソ喰らえだ！

「だが、男だ」

「ちつくしよおおおおおおおお

っ！！」

猛烈に悔しかったが、まあそれはいい。潰すだけだ。

「……はあ、あ、んじゃ教えてくれよその場所。そこら一体、焼き払えばいいんだから」

「悪を滅する行動理念は？」

「善悪関係無しに、俺の邪魔するヤツは禍根より焼き尽くせ」

「勇者とは殺伐としたものだな……」

いや、俺はかなり異端だと思うけどな。

と、買い物袋を持って駆けて来た一人のメイドが、息を切らしてまくし立ててくる。あ、あのメイドさんメツチャ美人！ エトワ

ルよりも少し年上ぐらいで、可愛い系のまたプロポーションがいい
モツコリ美女様じゃあありませんか！ もう俺この国に住む！

「王！ メルキユール姫が……さ、攫われました！ 例の、山賊グ
ループ、です！」

「何！？」「ふーん」「俺、山賊に寝返ろうかな」

三者違う反応を見せ、キルシュだけにメイドの投擲した林檎が放
たれたの言うまでも無い。……冗談やん、メツチャ痛いわホンマ。

三章 傳い容姿のお姫様、ウホッ、もあるよー！ 中編（後書き）

敵サイドにつきたいって、RPGやってて何度か思う事、ありますよね？（ねえよ

三章 儂い容姿のお姫様〜ウホッ、もあるよ〜 後編（前書き）

アッー！ な展開を含みます。

苦手な方は、ご遠慮ください。まあ、最後のほうに口直しの何かがあります。

三章 儂い容姿のお姫様くウホツ、もあるよーく 後編

急に荷馬車へと押し込められたメルキユール。まさか、街中でこんなに強引に誘拐されるなんて……！

魔術で抵抗しようとも思ったのだが、布を噛まされ、喋れない。音声魔術は発動不可なんて、もう絶望的だ。

と、攫った一人の男の人が、人懐っこい笑みを浮かべて見せた。あれ？

「へへっ、安心しろよ嬢ちゃん。あんたは餌に過ぎない。あの男を連れ出す為の」

「おい、サブ！ペラペラ喋るな！そんなだらしねえ口は、帰ってからじつくりと調教してやるからな？」

「は、はい！ お願いします、ジブさん！」

え、なんだろう。一瞬、何か薔薇のようなものが見えた気が……。

「それよりも嬢ちゃん、悪いがしばらく牢屋に入ってもらうぜ？
なあに、ちよいと知らない世界が展開されてるかも知れねえが、気にするな」

知らない世界？ 何か、わくわくしますね！

能天気な事を考えて恐怖を紛らわしつつ、メルキユールは荷馬車に揺られてドナドナされてゆくのだった。

「くそ……！ 勇者よ、早く助けに行くぞ！」

慌てているメルクリーオだが、そうまだなのだ。まだ慌てる時間じゃない。

「えー……ここはお兄様がスタイリッシュに助けに行く場面じゃね？」

「む？」

「迫り来る追っ手をかわしつつ、馬車を操る御者を倒し、華麗に妹

を救出。そして、拘束を解いた彼女に、こう言うのさ。『もう、好き勝手に出歩くんじゃないぞ？ 出歩くなら、オレも連れて行け』

……かあ〜っ！ いい男だねえ、メルクリーオ！」

「そうか！ それで妹の外出率が減るわけだな！ 流石は勇者、良く考えている！」

「乗せられてるわよ、貴方……」

高位の狩人服に身を包み、メルクリーオは颯爽と駆けて行った。行動が早い、いい王になるだろう。

エトワールは呆れ交じりの溜息を吐きつつ、俺を横目で眺めていた。

「それにキルシュも。絶好の機会でしょ？ あの子のハートをキャッチする」

「いや、あの姫様に返した手紙にはな、俺の魔力が残ってる。だから、居場所も分かる。救出なんてあつちゅー間だ」

「ならどうして？」

「絶望の淵に叩き込まれそうになった瞬間に現れる光。それが一番カッコいい！」

「……つまり？」

「美味しいとだけ頂こうかなあと……」

「清々しいほど下種ね、そんなところにシビれるわ」

「だろ？ それに……」

「？」

「発展途上なら、結構な宝物が眠ってるはずだしな！ 捕まってる人達を助けて、お宝も儲けて！ ガツポガツポのウハウハよオ！」

「盗賊にでも転職したらどう？」

そのジト目が妙に来る。……ああ、俺ってやっぱりMなのかもしれないな。

メルクリーオを追い越して、キルシュ達は一足先に山賊のアジト

へとやってきていた。

警備は普通だ。要所要所に一人ずつ。基本的過ぎて、なんだか笑いがでてるほど。いやあ、テンプレ通りで助かつちゃうなあ。

そう、宝物の保存場所。所謂宝物庫は、牢屋の上に設置されていた。お約束過ぎるだろう。

「宝物庫、ふんふん」

適当な鼻歌を口ずさみながら、カチャリと扉を開ける。鍵が掛かっていたのだが、針金の束のような代物で、難なく俺は開けていく。ほら、盗賊の心得はあるしな。

「馴れてるのね」

「昔、ちよつとな。あ、ほれ」

「ん？……刀？」

手渡されたエトワールの表情には、戸惑いが浮かんでいた。

見てみぬふりをしつつ、武器の性質でも語っておく。これは東洋の文献で読んだ。

「そうそう、『宝刀・桜花炎』だな。抜けば花散る炎の刃、ってな。

……お、『夢幻の剣』まであるじゃん。流星、溜め込んでるなあ」

『夢幻の剣』は、謎の透明な鉱石で作られた剣で、光などを弾く特性を持つ。また、魔力を剣に通すと、その特性を具現する性質を持ち、例えば水の魔力を入れると剣が青く輝き、血で汚れなくなる等の効果を得られるのだ。

一般武器の鞘に入れ、腰に括りつけておく。あんな馬鹿高そうな鞘なんぞに入れて使うなんて、馬鹿のする事だ。

刀を見つめて、瞳の光を揺らしているエトワールに対し、やはり尋ねてみた。

「……刀に、思い入れでもあるのか？」

「昔、ちよつとね」

「ふーん。ま、いいけどさ。次ぎ行こうぜ、次！」

お宝がっぱり！ うんうん、満足満足！

次々に倉庫を開けていく。が、武器ばかりで魔術書やらは無い。

武器も、あの二つ以外は心許ないものばかりだ。いや、高価なのは高価なのだが、実用に耐えない 装飾品としての武器ばかりだ。

「どうにも、このボスと趣味が合わねえなあ」

「そう？ 結構、いい趣味してるわよ？」

「いやいや、剣は究極の武器だろ？ それを眠らせておくのが、理解できねえ」

「理由は？ 私は結構何でも使うけど、剣が最強だと思ったことは無いわね」

「……剣は、全ての特性を持つてるからな」
「？」

「槍の突く、斧の断ち切る、弓矢の穿つ、宝物としての飾る。全て一本で出来る。勿論、全てが特化したそれらに勝るわけじゃないが、剣を極めるってことはそれらを全てこなせるって事さ。だから、俺は剣が一番強いと思う」

「……ふーん」

「ありや、俺と合わなかったか？」

「いいえ、見直したわ。剣とか、貴方は使わなさそうだし。そう言う武器関連の事、良く知った上で魔術を選んだんだって」

「そうだな………ん？」

何か、聞こえる。

いや……耳を澄ませば聞こえない事も無いだろうけれども、俺の勘がそうするなと告げている。何か、嫌な予感がするのだ。

「何か、聞こえてくるわね」

「鐘が鳴って鳩が飛び立つ的な？」

「その聞こえるを覚えている人はどれくらいいるのかしら。て言うか、男の人の声よね」

「……ああー、何となく分かった気がする」

どうして、メルクリーオは少子化といったのか。

警備が何故、一人ずつしかいなかったのか。他の連中は何をしているのか。

……嗚呼、最悪だ。

そう思った刹那、聞くのもおぞましい男の嬌声が、廊下中に響き渡るのだった。

え、あの……ええっ!?

サブと呼ばれていた男の人が、ジブと呼ばれていた男の人に組み伏せられている。

「あの、ジブさん……見てますよ？ 人が……」

「でも……結構、好きだろ？ そう言うの……ほら、シャツを脱げよ……」

「あ、そこ……!?!」

えええええええっ!?! サブさんのシャツが脱がされて、筋肉質の体が剥き出しに!?!

「ほ、ホントにジブさん……良かったんですか？ こんな子を連れてきて」

「なあに、ホイホイ着いて来たってことにすりゃあいい。そうだから、嬢ちゃん」

良くないです嫌です!?!

「それに、気を紛らわそうとしても無駄だぜ？ 知ってるだろ？」

「ノン気だつて……喰っちまう、男……ですよね？ で、でも……あっ!?!」

「どうだ、俺のモノは」

「……凄く、大きい……です」

「ははっ、可愛い事を言ってくれるなあ」

そう言つて、サブさんはジブさんの唇に

「見苦しいわああああああああああああ
「アッー!」「ああああああああああああ

っ!?!」
っ!?!」

聞き覚えのある声がしたと思った刹那、壁を撃ち抜いてきた何か
が男の人達を打ちつけ、倒してしまった。

肩で息をしつつ、やってきたのは……キルシュさん！ でも、何
か勇者にあるまじき凄まじい形相をしてるよ！？ いいの、子ども
の夢が台無しだよ！？

「ああつ、たく！ ハーレムファンタジーだつてのに、何でこんな
ヤバい絵図らが出て来るんだっての！ やるなら女子にしろ！」

何か見当違いなことで怒っているみたいだけど、嗚呼……なんだ
か、勇者みたい。いや、勇者なんですけど。

腕の拘束や口の布を取ってくれて、キルシュさんは手を握ってく
れた。……あ、震えてたんだ、私。……よく、見てくれるなあ。

「こんなおぞましい場所、とっとと出ようぜ。気が狂っちまう」

頭をかくキルシュさんだけど、隣の美人さんが勿体無さそうに呟
いていた。

「そう？ さっきの構図、美少年だったら……美味しいのに」

「止める止める今の俺の脳内ライブラリに展開されちまったじゃね
えか！？ ……って、大丈夫か？」

「……なんだか、新世界を見ていた気がします」

「そう。あれはね、女子の夢」

「やめい！ ここつてまさか……有名な発展場じゃねえのか！？」

「その通りだよ、勇者キルシュ」

何か出てきた。凄いの出てきた。

筋骨隆々で、身長は百九十センチを優に超え、服装は黒革のブー
メランパンツに、股間の例の部分に何か金属の突起がついたやつを
着ていた。

如何にもな……ゲイだ。

「お前が頭目か！」

「ああそうだ。ゲイルと名乗っている。……お前も、中々にいい男

「だなぁ。筋肉質の男もいいが、偶にはそう言うなよっとしたのも食べたくなる」

「ひいひいひいひいひいっ!?!」

「ここではゲイ仲間を集めて、いい男を捕らえてくるように命じてある……。予定は変わったが、君でもいいなあ、結構そるよ……!」

「ぎゃああああああああああ　　っ!?!」

「筋肉をびくびくさせて、こちらにゆっくりと歩み寄る様は、もうホラーだよ! 助けてええええっ! 誰か、助けてええええっ!?!」

「灯し、焼き尽くせ! 展開するは煌々たる炎! 我が道阻む怨敵を、その腕にて握りつぶせえ! 振り抜くは炎神の腕ア!」

「かなり本気の炎魔術。もうこれしかない! 冗談じゃなく本気の魔術だ!」

「炎の塊が腕のようにゲイルと名乗った男を襲うが、彼はその熱で何故か興奮していた。」

「OH! YEAH! 熱い、熱いよオ! 燃えてきたあああああっ!」

「ぎゃああああっ!?! 何か、何か股間がもぞもぞしてる! しかも何か光ってるし! 最悪だぞ、この絵図ら!」

「フツ、この股間の金属は受けた魔術ダメージを蓄積し、性的快感に変える道具だ! 最高の宝物よオ!」

「付けるな付けるな外しちまえそんなもんツ!」

「騒ぎ立てる俺を、呆れ混じりにエトワールは見つめていた。」

「……珍しいわね、貴方が押されてるって」

「ムリだ! ゲイはムリ! つか、怖すぎる!」

「おやおや、そっちが来ないなら、オレがそのだらしねえ穴に一発入れてやるよ!」

と、輝きが現れ、それが一点に集まっていく。

「そう……一点。股間の部分に。」

精神的にも肉体的にも限界らしく、もうその場所で倒れてしまっ
た。

泥に引きずりこまれるかのような睡眠感覚に踊らされ、もうろく
に感覚が無い。

だから……きっと、頬に柔らかいものが当たったのも、きっと気
のせいだ。

……ちくしょう、俺の馬鹿あ。

四章 突撃、魔族のメイドさん！

「さ」
歌姫、メルキュール・アバラスタ。

可憐にして純粋な歌声は、人々を元氣付ける。

明るく、歌に対して真つ直ぐなその姿勢は、男女問わず好感を抱かせ、その人を惹き付けるカリスマ性たるや凄まじい。

「……つと！ 終わりです！」

酒場が歓声に沸く。無論、その観客の中には俺がいるわけで。

「どーだいメルル？ エメラキスカの酒場は」

「みんないい人ですね！ 気持ちよく歌えるから、いいですよ！」

「バーカ、お前の歌がそうさせてるんだよ。流石は歌姫だ、歌がこんなに心地良いなんて知らなかったぜ」

「え、えへへ……」

彼女の歌を聴いていると、気分が楽になる。

ここ、ワグナーの酒場には、流し 所謂、楽器の弾き手や吟

遊詩人が集まる事がある。

彼らは金を求めて弾き語りをしている。その他の情報なども彼らが語り、貧乏な村でなければ歓迎されるものだ。

「おおーい、チップはいいから彼女に何か奢ってやってくれよ！」

「んじゃミルクか？ 早く大きくなれるようになってな！」

「バーカ、そこは果実ジュースでも気前良く奢ってやれっつんだ！」

「言うなあ、色魔勇者め！ よっしゃ、パインジュース奢ったらあ
！」

酒も入って、ほろ酔い状態の客を煽り、奢ってもらおう。

意外にもこんな雰囲気慣れているのか、メルキュールは笑顔で差し出された氷入りのジュースに口を付けた。

「美味しいです、ありがとうおじさん！」

「なーに、気にすんな嬢ちゃん！ また歌ってくれよな！」

「はい！」

何だかそのやり取りが微笑ましく、そして眩しくて、見ていられなかった。

ワーグナーの訝しげな視線を受け取っていたので、応じる。おおう、不細工だ。

「今、なんか失礼な事を思わなかったか？」

「まっさか」

「……今日の飯だ」

相変わらずの仏頂面。もう四十になるってのに、独身なのはその不景気な面が問題なんじゃね？

思いつつ、置かれて行く品々……っておいおい！

「うえええ……多いつて。ロース肉のビーフシチューにカイザーゼンメル、おまけにあまった鴨肉のサラダ……嫌がらせか？」

「ビーフシチューにはガーリックとオニオンのチップスを添えてる。

……体力付けとけ。お前、最近なんか疲れ過ぎだぞ」

「……んな事あねえつての。けどまあ、最近魔術とか使う機会が増えたしなあ」

「その似合わねえ剣も機会とやらで貰ったのか？」

「盗品だ。いるか？」

「いらん」

話を逸らしつつ、木のスプーンでシチューを一口。うん、良く煮込まれた牛肉が柔らかい。赤ワインで一度臭みを飛ばして豪快に焼かれてある為か、シツカリと歯ごたえがある柔らかさ。コクのあるブラウンシチューは玉葱とブイヨンの香りが強い。この店のスープを水代わりにしているらしく、安心する味だ。

「美味いだろ？」

「ああ。……なんでアンタ、モテないんだろうな」

「フンッ！」

「いでえ！？ ってこら！ 叩くな！ 俺の優秀にして究極の脳細胞がお亡くなりになっちまうだろ！？」

「桃色の部分が抜ける事を期待してな」

「あー……メルキユールたんちゅつちゅしたいお！」

「悪化してやがる!？」

溜息をつきながら、ワーグナーは注文を受けてどこかへ行ってしまった。

今、メルキユールはエメラキスカに滞在している。

と言うのも、彼女の奔放振りを見かねた王が打診していたらしい。少し広い世界を見せてやれば、大人しくなるのではないかと。

多分間違っている。世界の一端を見てしまえば、全容を見たくてたまらなくなるのだ。箱の中に何が入っているのかも知らず、それが良い事でも悪い事でも、中身を知っていても……人は開けたがるものだ。

知っていて咎めなかった俺も俺だが、ちゃんと護衛も付いている。首元を冷やす鉄の冷たさを覚えつつ、両手をゆつくりと挙げた。

「今、姫様に不敬な発言をしました？」

「じよ、冗談やがな、ホンマ短気やなあ」

「あらあら、それじゃあもうちょっと紳士的に頼みますね？」

「ですが、俺の愛馬は凶暴です。なんせ、毎晩毎晩嘶いていますからね」

「切り落として差し上げましょうか？」

「いやん馬鹿冗談じゃん！」

思わず股間を庇った事で、カウンターテーブルに乗った料理が見えたらしい。どこことなく目を輝かせ、鮮やかな桜色の髪を揺らしている。

「あ、シチユー……」

「ああ……良ければ、貰ってくれ。こんなに喰えん」

「え？ ……あの、女性でもこれくらいは食べますけど」

メイド服を纏う、この場なら給仕である女性　ほら、あの林檎投げてきたヤツ　が、心配そうにこちらを見てくる。

「食べなくても大丈夫なんですか？」

「ああ、あんまり食が太い方じゃない」

「どころじゃないです！ ちゃんと食べないと、死んじゃいますよ！？」

「あーあー、はいはい。んで、貰うか貰わないのか？」

「……頂きますけど」

「おう。この料理は絶品だからな！ そりゃあ城みたいに上品っつーか味薄くはないけど、美味いぜ？ んじゃな」

これ以上ここにいと、どうせワグナーが追加の料理を持ってくるに違いない。

賑々しい酒場の喧騒から弾かれるように、俺は店を出た。

「キルシュの事を調べてほしいだど？」

エトワールはメルクリーオにそう頼んでいた。

あの後、気絶したキルシュを送ったその後だ。聖アバラスタに戻り、王に直接掛け合っている。

「ええ、そう。しばらくこの騎士達に剣を教えてあげるわ」

「それは助かる。我が騎士達は明確な実力者がいない。しかし、君達は親密な仲かと思っただが……」

「つい最近、知り合っただばかりよ。……彼、多分だけど、何かあった人だと思うわ」

「それはオレも感じた。面白おかしいヤツだが、何故か……暗いものを感じる。それに魔術の腕、若くして知識の含蓄、オレも気になっっていたところだ」

両者合意し、エトワールは寝所の指示を貰い、その場所へ赴く。

「……そうよね。私だけ裏を知るのは、卑怯よね」

歩きながらの呟きは、どこまでも続く廊下に反響し、やがて消えていった。

この後、美少年が住む宿舎から、パンツが何枚か盗まれていた事と彼女については、きつと関係ない。多分、関係ない。

夜の風に当たりながら、魔力を制御していく。零れていく赤の燐光。それは次第に蒼へと変わり、そして緑に変わっていった。

円を描きながら、燐光は花びらのように回っていく。月のない晩に、その輝きはより一層、美しさを増していた。

最終的にそれは白と蒼の入り混じった輝きとなる。炎のようではない、その実、冷たい。まるで、心を映しているかのような変化は、唐突に消えた。

「……受けていたのは、姫護衛と俺の暗殺か？」

「いいえ？ ですが、ちよーっと……ここで旅に出ただけで、勇者は旅に出て、そのまま戻ってこなかった」

「そう言う筋書きかあ。……やれるとでも？」

「メイドにも色々あるんですよ？ まあ……私みたいなのは、極少数ですがねッ!!」

思い切りの良い踏み込みから、抜き打ちの姿勢を保ちつつ迫ってくる。成る程、抜き打ち 居合いは防御型の剣術だ。定石を崩す事で、動揺を誘っているのだろう。

しかし、まあ……良くも悪くも真っ直ぐすぎる。

「紡ぎ、圧せ！ 解き放つは風の双弾！」

白刃取りをしながら、両の掌に集めていた風の魔力を放つ。

結果、刀は別々にかけられた風圧によって押し折れた。

咄嗟に飛び退いたのはいい判断だ。 相手が、ちょっと悪かっただけ。

「流れ、払え！ 打ち払うは水流の打鞭！」

発動させたのは水の魔術。粘度を高めた水を勢いのまま振り回し、濡れタオルを顔面にぶつける要領で放った。

魔力を込めているので、普通の人間には触れると抵抗できないものだ。

が、目の前で起こったのは……その鞭をカフスに包まれた手で弾くメイドの姿。

雲が晴れていく。そこには満月があり、降り立った月光は彼女を幻想的に照らした。

「……半魔、いや純粋な魔族だな。しかも、目立った特長がない。

目が輝き、人の姿をした高位悪魔の種族　そうか」

「流石ですね。そう、目が月光で紅く輝くんですよ。上手く隠してきましたんですけど、知識が半端じゃないですねえ」

「ってことは、魔王系か」

「そんなご大層なものじゃないんですよ。まあ、バレたんなら、こんなおもちやに頼らずとも……！」

持っていた鞘をあつさりとは手で縮めてみせる。開かれた手にあったそれはもう、小さな金属の塊でしかない。

「特殊能力を持たない代わりに」

「身体能力がインフレなんだろう？　そうまでして、か。……なら、俺も披露しないとない！」

そう言った彼　勇者キルシュは拳を打ち鳴らし、ローブを脱ぎ捨てました。体術を使うつもりらしいですが……

「……魔族に敵うとでも？」

「ああ、多分……お前じゃ見えないし」

刹那

「ぐっ」

鳩尾に衝撃が来たと思った刹那、

「がはア」

刹那、刹那、刹那、刹那。

その攻撃は全て、瞬間で行われているのでしょうか。普通の人間ならば致命的な打撃を、どういいうわけか人間が行使してきます。

「な、めるなアツ!!」

払った腕を掴まれ、勢いを逆手に取られた拳句、蹴倒されました。
……速い!

「あ、あなた……! 魔術師ではなかったのですか!??」

「あー? だから、最初っから言っただろ……?」

彼は何か胸元に手を え、ちょ!?! 今、胸に全く触れずに……!
!

「俺は、勇者(笑)だ」

ドヤァ!

ブラジャーを片手にそう笑った彼を、次の瞬間私は全力で殴り飛ばしました。

どうやらゴキブリ並みの生命力があるらしく、痙攣しながら彼は笑っています。凄いです、エロに関しての執念。

「うへへ……可愛いモッコリ美女ちゃんのブラジャー……!」

満足そうに笑う彼からそれをひったくると、彼は泣いてすがり付いてきました。妙に愛嬌があります。

「お〜い、返してくれよ〜! 俺のブラジャーちゃ〜ん!」

「や、私のですから! と言っか見っとも無!?! ホントに勇者なんですかあなた!?!」

「まあそんな不確定要素満載な疑問はさておき」

「置いとかれた!?! と言っより勇者に不確定要素が!?!」

「ねえねえ! 俺のハーレムの一員になってちょーだいよお!」

「あ、あなた……! 魔族なんですよ、私!」

そう叫んでみても、彼の表情は変わらず、それどころか溜息までついて見せます。

「で?」

「えっ……?」

「いや、魔族だから、何?」

「だ、だって……き、気持ち悪い、でしょう?」

魔物の仲間だと言っただけで、非難されてきました。

石を投げられるならいいんです。言葉も、もうなれました。でも、

もう武器を持って殺そうとしないでほしいんです。あまり、殺したくはないから。こっちは素手で、その事切れる感触が……怖くて、夜、眠れません。

他の人間が、気持ち悪いと思い、剣を向けた。それだけの行動が、全員に伝播するのは簡単なんです。

みんな欲しいんですから。団結して敵うレベルの、敵が。

でも、彼は何を言ってるんだと言わんばかりに、呆れて見せていました。もう鼻息が凄いです。どこから出てるんでしょう。

「はあ？ いや、あんたメツチャ可愛いしメツチャスタイル良いし

……ああ、辛抱溜まらん！ 胸揉ませて頂いても宜しいですか？」

「いいわけないです」

「しょんな冷たい……」

本気でしょぼくれている彼は、何だか……怖がって、ない？

「あの……怖く、ないんですか？」

「……怖いと思っただけなのかな？」

「……っ！？」

何、今の。心の奥を、揺さぶられたような……。

「どこか、甘えてんじゃねえのか？ 怖がってもらえるって。それを嫌がる素振り見せりゃ、同情くらいはしてくれるって？」

「そ、それは……でも、あの動き！ あなたは、魔族では……！？」

「ちやうちやう、ありえへんがな。俺は正真正銘、クソ見てえな勇者一族に生まれちゃった男さ。ただ、悲しいくらいに才能がなかった。良くあるだろ？ 良くできた兄、劣等感を持つ弟。そう言う事だ」

どう言う事？ って聞く、雰囲気じゃない。

飄々としているけれど、凄く不愉快だと言う目をしています。

「力で捻じ伏せれば、正義なのか？ じゃあ魔王が正義を振るってらって事になるだろ。略奪も、法的にいけないことは全て力で破れちまう。だったら、そもそも、正義なんて言葉なんか要らない。勇者ってのは、正義の味方だ。けどな、正義ってのは必ず……人を殺

す。勇者ってのはな、こんな時代にやただのピエロなんだ。認めたくないって言っただけで、何もしゃない。俺は子どもなんだよ」東のほうを一瞬憂いで、彼は表情を切り替えたらしいです、顔付きが変わりました。渋く、結構……カッコイイかもしれませぬ。

「大人と子ども境界ってのは、まあ色々ある。けどな、俺はこう考えてる。無茶をしても、無理はしなくなる。自分の小ささを知り、惨めな思いをしてから……大人になるんだ」

「え……」

「俺はガキで、勇者でもないって事さ。まあ、本当にそりやどうでもいいんだよ。魔族だろうが勇者だろうが、モッコリするには関係ねえ！」

え？ あの……手を取って、何を？

「俺のハーレムに入ってくれ！」

「あ、あの……？ わ、私の事を……密告しないんですか？ 魔族だって……」

「ああっ！？ 知るか！ 俺の女に手え出すやつは、国だろうがドラゴンだろうが戦ってやらあ！ 文句言うヤツはぶっ殺す！ これだよ、完璧だ！」

強引な、しかも勝手に私も彼の女扱い……。

でも、不思議と嫌じゃない。ああ、そうか……彼は、何もかもを受け入れてくれてるんだ。

きつと魔族でも、魔物でも、可愛ければOK。ご都合ですけど、女として嬉しくないと言えば、嘘になります。

「……いいですよ？」

「え、そうなの！？ いいの！？」

喜色満点の笑みは、何だか可愛らしくて。

「はい！ いっぱい仲間を増やして、楽しく暮らしましょうー！」

夢でした。

友達がいっぱいいて、手を取って笑いあって、変な事をして怒られて……そんな日常。

彼なら、笑わずに受け止めてくれそう。そう思ったから、彼にっ
いていく。

「おおー！ やったあ！ やったああああああ　　っ！
」

夜中だと言うのにはしゃぐ彼　　キルシュさんを、私は苦笑して
みていました。

と、家の人でしょうか。こっそりと壁際にいた私に声を掛けてき
ます。

「彼のお嫁さんになるの？」

「さあ……？」

「ふふっ、彼は皆に好かれてるから。あんたも、きつと楽しいと思
うよ？」

若い女の人は、それだけ言って奥に引っ込んで行きました。

「ひゃっほう！ よっしやよっしやあ！　　ワイ、ついにやったんや
あ！　　ホンマ、ホンマ最っ高やあ！」

……あの訛り、なんなんでしょう。

酒場に戻り、まだ歌っていたメルキュールのお尻をタッチ。さり
げなく、がポイントだぜ？

「ぐへへ、メルル〜！」

「や、ちよつと！　　お、お尻触るのはいけません！　　エッチなのは
ダメなのですよ！」

「やー、スキンシップスキンシップ！　　気にしない気にしない！
　　ううん、すべすべ！　　いいお尻ちゃん！

何てやり取りをしていると、クスクスと笑う声が。奥に潜んでい
た、スミレだ。

「メルキュール様、可愛らしいですね！」

「ちよ、ええっ！？　　スミレ！　　あなたあんなに彼を嫌ってたじゃ
ないですか！」

悲痛な叫びも、知らぬ顔をしつつ頬に指を当て、こちらに向かつて含み笑いを浮かべてきた。こいつ、中々いい性格してやがる。

「はて、何のことやら。ねー、キルシユさん！」

「うへへー！」

「ああもはや言語すら崩壊してます!? ちょっとキルシユさん！ウチのメイドさんに手を出さないで下さい！」

「あらあら、それじゃあメルキユール様も一緒にいちゃいちゃすれぱいいじゃないですか」

「う、あ……べ、別に、イチャイチャしたいわけじゃありません！た、ただ線引きは、その、キツチリして欲しいだけなんですから！」

「ツンデレk t k r！ みんな、喝采だ！」

酒場の皆は良く訓練されており、凄まじい拍手が沸く。サンキユ

ー、お前ら好きだぜ！

「だ、誰か……まともな人おおおお

っ!!！」

「呼んだ？」そして俺である。

「呼んでませえええええ

んっ!!！」

歌を締め括るのは、悲痛な絶叫だった。うんうん、引きつった顔も可愛いねえ。

四章 突撃、魔族のメイドさん！（後書き）

仲間、1ゲト。

現在ハーレム構成。用心棒：エトワール、メンバー：スミレ以上。

五章 南の村へ、ぶらりナンパ旅 前編

「うへへへへへへへへへへ〜！」

「あはははっ！ もう、キルシユさ〜ん。胸はいきなり揉まないでくださいよ〜！」

「うへへ〜！」

「え、褒めて頂けるのは嬉しいんですが……そのお、やっぱり人前だと恥ずかしいです」

「うへへへへ〜！ うへへ、うへへへへ〜！」

「でも、そんなのが好きなんだろって？ それは貴方でしょう？」

「……えへへ〜！」

「感染した!？」

そんなやり取りを黙ってみていたメルキュールが、ようやく突っ込みを形にできた。

キョトンとしている二人に向けて、高速の言葉を並べ立てていく。その表情は可愛らしくも、鬼気迫っていた。

「あ・の・で・す・ねえ！ うへへ〜！ だけで会話を成立させないでください！ それと、い、いやらしいのは駄目だって言いました！ もう絶対にそんな事を言ったりしたりしちゃいけませんよ！」

「そうか、分かったぜメルル。お尻触っていいか、スマレ！」

「もう、ちよつとだけですよ？」

「うへへ〜！」

「ああもう！ 何一つとして伝わってないこのもどかしさをどこにやれば！」

頭をかきむしっているメルキュールはさておき、俺らは今、幸せの中にいた。

互いが互いを認め合い、キャツキャウフフ、イヤンバカンな関係に！ ……え、古い？ うるせえ！ いい言葉は古くてもいいんだよ！

結局、頭を抱えて酒場のカウンターに突っ伏してしまったメルキユール。そんな彼女へ微笑みかける、俺。うん、超イケメン。

「そんなに悩むことはないぜ？」

「悩ませている本人が言うのと殺意沸きますね！」

「そ、そんなに俺のことで悩んでいたなんて……！ もう、照れるだろ〜？」

「ああああポジティブさがこんなにムカつくなんて！ 埋めてやりたいですよ!!」

「俺の、心の隙間を？」

「これ以上なく満たされた表情しててまだ言いますか！」

「えへへー！ キルシュさ〜ん！」

「ああ今度はこっちが病気に……!!？」

「こらこら、えへへーだけで全てが伝わるようにしないと」

「まさかのダメ出し！？ 何なんですかこれ!？」

ひたすらに翻弄されているメルキユールだったが、それはさておいて。

「よし……行くぜ！」

前から気になってたんだよねえ。

名前：メルキユール・アバラスト

LV : 2

職業：プリンセス

ステータス

体：10

力：2

技：3

速：5

守：0

魔：10

運：100

特殊技能

魔術・水、魔術・光、歌姫の心得、突っ込み二段

「なんか出たああああ！？ え、何ですかこれ、私のパラメーター！？ 突っ込み二段って何！？」

さっそく、その特殊技能を遺憾なく発揮しているメルキユール。うんうん、突っ込み姿も絵になるなあ。

しかし、項目の足りなさに、思わずひざをついてしまう。

「くっ……やはり、修行が足りねえか」

「ええええ！？ これでも異常だと思えますよ！？ こんな事ができる人ってまずいないと思うんですけど！？」

「……スリーサイズを出せるようになりたいのに」

「公然堂々セクハラ宣言！？ やっぱり最低ですこの人！？」

愕然とメルキユールは口をあけていた。その口に昼飯であるイチゴのゼリーを突っ込んでやる。

「……甘いです」

「そうかそうか」

なんて事をしていると、目の前で星が散った。正確には、後頭部への衝撃の後に、だが。

「痛え！？ だ、誰だ！ 人が『はい、あ〜ん』『あ〜ん！ あ、甘くておいしい！ 貴方の味がします……』って脳内補完してる最中に！！」

「ロクでもなさがマックス超えた！？」

「美女かと思ったか？ オレだよ」

「……ワグナーかよ。んで、何でたたいたんだ？ 俺の肌色の脳細胞が活性化したらどうするんだ」

「これ以上があるのか！？ ……テメエ、オレの用意してやった飯くらい最後まで食べ！」

「腹がいっぱいなんだっつの！」

「ゼリーしか食ってねえだろうが！ 何で動いてんだ妖怪か何かか

お前は！ 愛と勇気で動ける妖怪パン男か！？」

「バーカ！ 俺は今幸せでいっぱいなんだよ！ だから、飯食わなくても愛を食う。なー？」

「ご飯を食べてくだらないと、もうチュツチュさせてあげませんよ？」

「おい、フィレステーキにライス、サラダもな。グレイビーソースで頼むぜ？」

「お前……それでいいのか？」

「勇者つて……何だったんだろう……」

沈鬱な表情を浮かべる二人だったが、ワーグナー自体は良い傾向だとつぶやきつつ、厨房に向かった。……しまった、食べれるかな、俺。

肉が焼ける良い匂いがするのだが、食欲が全然わかない。ダメだ、昨日咄嗟に肉体強化使っちゃったし。

「……で、聞いたか？」

ステーキやライスを並べながら、ワーグナーが語りかけてくる。

「何が？」

「夜の湖に、時折、妖精のような少女が水浴びしているらしい」

「……そっか」

ロリババァ

きつと、あの少女の事だろう。そっか、やはり解呪は成功していたらしい。うんうん、美少女はあるべきままが一番、こんな平和なニューズばかり聞きたいね！

「お、どうした？ いつも節操ないお前が、珍しい。渋く決めるじやねえか」

「フン、既にエレクトリックな接触済みさ」

「意味が分からんがこいつ、出来る……！」

戦慄しているのか、ワーグナーは冷や汗をぬぐっていた。いや、あんたも結構、役者だな。

ステーキを切り分けて、ミディウムレアなそれをソースと絡めて口に放り込み、サラダを一気に詰め込んだ。

「美味しいか？」

「……不味い。だからメルル、あーんしてくれ」

「脳内補完を実行に!？」

と、スウィングドアに豪快なタツクルをかませつつ、登場した人物。

「おい、聞け！ 良い情報持ってきて」

興奮した面持ちの、見知らぬ大男。ふと、彼の周りに奔る銀閃ワグナーの果物ナイフだ。

「備品を大切に扱え、クソ野郎が。入るところから出直して来い」

「は、はい……」

鋭い眼光で射抜かれた男は、ただただそう頷くしかなかった。

「良い情報って何さ」

食事を平らげたキルシュへと、男は語る。よく見れば、こいつは街と村を行き来する行商人じゃないか。俺ももちろん、変態魂で熱い友情を結んだ仲である。既婚者だが、その情熱を理解できるなら仲間である。美しき哉。

「ああ。南の村に行ったんだがな、可愛い嬢ちゃんがいるって噂だったんだ。これがまた可愛いんだが、喋れずに村人からは気味悪がられている」

「……で？」

「治せるのか？ 治せたら、その嬢ちゃんの保護者が交際考えても良いってよ」

「んー……病状による。喉が悪いなら、ぶっ倒れるくらいに集中すれば何とかならんわけでもないが、精神的要因でそうだったのはなあ……リハビリテーシオンくらいしか出来んぞ？」

たまにいるのだ。何かのショックで声を失う人物が。

ショックや弾みが、一番恐ろしい。一瞬で、掛け替えのないものを失う引き金となりうるからだ。

「ていうか、何でそんなに肩入れしてんだ？」

「いやあ……死んだ娘を、思い出してな。あいつも喉を患っていて、出来れば……助けて欲しいんだよ」

「……遠慮しとくよ」

サラリと拒否すると、黙って聞いていたメルキユールが眉を吊り上げた。

「何ですか！ 治せるかもしれないですよ！？ だったら、見てあげるべきです！」

「……お前、脳が足りないのか？」

捲くし立ててくるメルキユールをにらみつけ、俺は続ける。

「中途半端な正義感こそ、人を傷つける。中途半端に期待させといて、治せなかつたらどうする？ より病状が悪化するかも知れねえ。そうなつちまったら、お前は自分が許せるか？」

「そ、それは……」

「俺も傷つきたくないんでね。真つ平ごめんさ、医者としてその村に行くのなんざ」

立ち上がって、自室に戻り、装備を整えてくる。

いつものローブ、夢幻の剣をベルトに差し、スウィングドアを開く。

「どこに行くんですか！」

「あ？ ナンパだよ、ナンパ。ハーレム目指してんだから、日夜努力すんのは当然だろ？」

去っていく俺へ、罵倒の言葉が飛来する。メルキユールのものだ。

「馬鹿！ 勇者失格ですよ！ 勇者だって思ってたのに！ 絶対に、私は貴方を勇者って認めませんから！！」

答える気にもならず、俺は歩いていく。

風の向くまま、南の方角へと。

五章 南の村へ、ぶらりナンパ旅 中編

今日も、暗い一日が始まる。

外に出たくない。出たら、悪口を言われるから。言われても、この口は言い返す事さえ叶わない。

でも、お母さんやお父さんに迷惑をかけたくない。だから、笑って家を出る。

手には一つの桶。井戸の水を汲んで、帰って来る事が私の仕事。歩いていると、こそこそとした話が耳元を掠める。

「難儀よねえ」「あそこの夫妻も、よく水汲みなんかにかせるわ」「働いて結構じゃないか、ウチのぼんくらとはわけが違う」「四歳児に何期待してんだよ」

なんて事のない、朝の会話だ。

私とは関係ないことでも、そう聞こえてしまう。自意識過剰なのは分かってはいるけど、怖い。人の笑い声が、怖いのだ。

井戸のある広場に行くと、同じ年頃の男の子達が、私を見て話し始める。聞こえるか聞こえないかの、微妙な声で。

「あいつ、また来てるぜ」「喋れねえのに何しに来てんだか」
無視して、水を汲む。

重いけれど、慣れてきた。コツは、腕全体を伸ばしてしまう事。肩からまっすぐに、曲げないように取っ手を持つ。

けど、転んでしまった。足が、差し出されたのだ。

それをみて、弾けるように笑う男の子達。大人たちの声も届かず、ただ、こちらを嘲っている。

泣きたい。けど、泣いたら……余計に笑われる。

再び水を引き上げる。瞬間　水が、浮いた!?

いや、男の子達の持っている桶から、水が無くなっている。どう言うわけなのか、それは一人の男の人へと集まっていった。

「おいおい、お前らいくらその子が可愛いからって人にあたんなよ。」

不細工が何やっててもモテるワケねえんだから」

水を操る男の人へ、男の子達のリーダー格が詰め寄っていく。

「おい、何だよお前！ そいつは抵抗しねえから、何したっていいんだぜ？」

「そうやってまだ性的な行為に及んでいないってのもガキならではだけどなあ……語り口と感じで分かる、お前童貞だろ」

「どどどど童貞ちゃうわ！」

「まあ、ならこういふのはどうだ？」

水は、一瞬でそのリーダーの全体を包む。耳だけは無事にしてあって、男の人は口だけで笑いながら男の子へ、そして他の子へ威圧をかけた。

「抵抗しねえ、出来てねえなあ？ ならよ、何したっていいんだよな？ そりゃあ楽しそうだ、混ぜてくれよ」

男の子の腕に、一撃。顔に、一撃。殴る、蹴る。単純に威力のありそうな攻撃を、急所以外に当てていく男の人。

何故だか分からないけれど、私は男の人の袖を引っ張っていた。

と、その男の人は、急に笑みを浮かべた。

「おや、止めるのかい？ 君はこいつら全員に恨みがあるんだろう？ 足をかけられて、水をこぼされて。あの反応からして、今日が初めてじゃあない。君が止める義理がどこにある？」

苦しそうに暴れる男の子を見て、私は急いで首を横に振った。もう、止めてほしい。

すると、男の人は急に水を解いた。そして、そのまま水を球に変えて、少年達を残らず打ち倒す。

「……君も、気に入らないな。どうして殺してやろうと思わない？ どうして、痛めつけてやろうと思わないんだ？ ほーほーご立派

」

聞かれても、答える術なんて

「へえ、言葉には言葉で返さないってか」

っ!?

「どうして分かるの、ってか？ それはな……」
と、駆け寄ってくるさつきの子達。

私なんか眼中になく、その男の人に、何故かキラキラした目を向けていた。

「ゆ、勇者キルシユ様……！？ なあ、あんた勇者キルシユだろ！？」

えっ！？

「……はあ。分かってんなら、話が早え。この子はな、俺が目をつけた女の子だ。到らん事してみろよ？」

「い、いえ！ 滅相もないです！ あの、『火焰の聖拳』に会えるな」

「止めるッ……！」

鋭い怒声が響く。

男の人は、壮絶な顔をしていた。怒り、悔しさ、悲しみ。負の感情がぐちゃぐちゃに交わり、怒りだけが出てしまったかのような、雨模様のように強い感情。

それらを一瞬で消して、男の人は笑って見せた。

「……今の俺は、女の子大好き！ 『恋の魔術師』キルシユ様だぜ？」

「うわ、だっせえ」

「うっせ！ 溺れさすぞデメエら！」

蜘蛛の子を散らすかのように、男の子達が走り去っていく。みんな、笑顔で。

『火焰の聖拳』、勇者キルシユ。

かつて、強大な力を持った魔族を、命かながら、炎の拳でねじ伏せて、殺したとされる。

当時はまだ、十にも満たぬ年。それで、魔王系の魔族を倒してしまったのだ。勇者として、彼は誇らしくしているかと思っただのに。

こちらに向けて、何か変な笑みを浮かべている人からは、そんなものを感じさせなくて。

「やあ！ 改めて相談なんだけどさ、俺のハーレムに入らないか？
なんて事を言い出したのだから、私のイメージなんて木っ端微塵
に吹っ飛んでしまった。」

「……ふむ、君がキルシュか。すまん、嫁は買い物に出ている」
「はいはい！ 今をときめく魔術師、水もしたたり、風もなびく良
い男！ キルシュです！ お宅の娘さん、俺のハーレムにくださ
い！」

「そんな挨拶で娘をやるんでも？」

「……マンネリとしてきた貴方、それを打破すべく新婚に戻ったつ
もりで、裸エプロンなんてどうだろう」

「エプロンはフリルタイプじゃなく、シンプルな構造の奴のほうが
個人的には好みだったりする」

「……」
「お風呂にします？ とか王道展開もいいが、ここは敢えて、彼女
に来てもらって率直な反応を楽しむのが乙なものだと思う。それこ
そ、あのころの二人に戻った気分、な？ でも思いつきり楽しむ
には……ねえ？」

「そうだな。よし、娘をやるう」

ブンブンブンブン！

ありやりや、やつぱ娘さんの方が納得しないか。ていうか、そん
なに激しく首を横に振らなくてもいいじゃん。

出されたコーヒーは、苦い。むせる。

甘いものしか飲んでいなかった所為もあつてか、これまた抜群に
苦い。誰だ、こんな泥水みたいな発明した奴。しばいてやる。こ
の最低野郎め。

「んじゃ、ちよつとあーんしてくれ？」

「？」

「ああいや、ここに飴があるんだ。こいつが大丈夫かどうか、ちよいと調べる必要があるのさ」

「……ああいう薬か？」

「俺のテクは薬なんざいらん」

「童貞だろ、お前」

「どどどど童貞ちやうわ！」

似たような台詞を聞いた気がするが、まあ、覚えていないのでいいか。

ともあれ、口をあけてくれる。

「……ふむ」

風のとおりが悪くなっている。だが、それだけで声が出ないなんて事はない。恐らく、精神的な要因が引き金となり、外部的な要因を悪化させているのだろう。

とりあえず、治しておくか。

「ほい、飴ちゃん。すんげー美味いぞ！」

疑っている少女だったが、意を決してそれを口に含んだ。

と、暗い表情が一転し、笑顔を見せてくれる。うんうん、やっぱり

りこつという顔が美少女には似合うねえ！

「どうよ、蜂蜜とミルク、そして薬草を黄金比で調合した俺特有の飴は！」

「お前さんが作ったのか？」

「ああ。薬草とかなら、そこら辺の街医者には負けん。あそうそう、ちよいとお二人さん、目を瞑って？」

父の方が肩こりで悩んでいるのは、あの行商人から聞きだしていた。

ここは、一気に治しておこう。

「紡ぎ、撫でろ。展開するは堂々たる緑。その慈悲を、そよ風に乘せて与え給わらん。そよぎ吹く女神の風！」

外傷は水の呪文を。内部には風の呪文を。

癒しにも、それぞれ担当がある。水の呪文は威力が強いため、致

命傷などの治療に使うのだ。水は癒しをくれる反面、過ぎれば毒になるのだ。岩の内部からじわじわと浸透し、いつか岩を砕くように。何にせよ、軽い内部の傷には、風が一番。

優しい風は少女の喉へ、少女の親へと吹いて、やがて収まっていた。

「……凄いな」

軽く肩を回し、男が感慨深そうに呟いた。少女も、風邪気味だったのか、とても驚いた表情でこちらを見つめてくる。

「本当にお前さん、あのキルシュなのか？ 使っている魔術に炎が混じってねえぞ」

「……あんたは、どうあつて欲しい？ 英雄の俺か？ それとも、遊び人の俺か？」

「さあな。どつちもしらねえから、どうでもいいんじゃないか？」

「じゃあ今は遊び人だ。いや、ハーレム作るために動いてんだから、結構……仕事してる？」

「それは趣味だ」

「否、生き甲斐だ！」

「もうちょいマシな生き甲斐見つけやがれ。……ちよつと、こつちに」

父親に呼び出され、家の外でキルシュは壁にもたれ掛かる。

「んで、何だよ。まさか……お前、俺を掘る気じゃ!？」

「その腐った脳みそを捨ててから話をしよう」

「冗談だよ。聞きたいのは、あんたの娘の病状だろ？」

「……聡いな」

誰だつてわかる。傍目にも浮ついて怪しい俺を家に招き入れる時点で、父親として不適格だろう。知らない人を上げちゃいけません。父親は後頭部を描きつつ、言葉を続けた。

「あの子 シュニーは、どうなんだ？」

「外傷は治した。あれで喋れないなんて事は、絶対にないね。元の状態でさえ、既に話せる状況にあるんだぞ？」

「なら、どうして……」

「精神だよ。これは東洋医学の問題だが、気を強く持てば自然と抵抗力が上がるという話がある」

「眉唾だな」

「だが、これが実に当たっている。実際、生きようとしている人間は、強い。輝きが違う。まあそれは死に触れた人間だけの特権だがね。死なないと思うことによって、死なない体が出来てくるのさ」

「どういう意味だ？」

「あの娘さん、喋ろうと意識してないって事さ」

喋れない体ではない。ただ、精神的に脆いだけだ。

「虐めに遭ってることは気づいてるな？」

「当たり前だ」

「まあ虐められる原因なんて、人とちよつと違いばいいだけさ。みんな、叩く敵が欲しいんだよ。勇者でもそうだ、何かを討伐するときに敵を仕立て上げてやった方が、馬鹿どもがアホみたいに働いてくれるよ」

「……で？」

「喋りたい、言い返したい。そう思えば思うほど、自分は喋れないんだって自覚せにやららん。ま、最悪なループだわな」

シュニーといったか。あの少女も不憫なものだ。

赤の他人の、その人物達にとってはとりとめもない会話が、彼女を追い詰めているのだから。

他人の笑い声が、自分を笑っているように感じる。この手の不安は酷く根付き、そのうち、対人恐怖症に発展するだろう。

「どうすればいい……?」

「簡単だ、二つある。世界を変えちまえればいい」

至極簡単に、そう言ってみせる。あれ、何でぼかんとしてるのオッサン。

「……こんなときに十四歳病か？」

「アホか！」

真面目な話しだっつーに。

「……彼女にとつての世界は、この冷たい世界だ。誰もが喋る自分を疎んでいると思ひ込んで、そんな世界。なら、連れ出しちまえ
ばいい」

「まさか、ハーレムって……のは……」

何か核心に迫ったような表情だが、そんな立派な理由じゃない。
いや、息子が立派になる理由だ。

「ああ、違う違う。それは俺が性的なうぶんあはんをしたいが為に
作ってるもんだ」

「……もう一つは？」

「いつそ、殺しちまったらどうだ？」

寒々しいまでのシンプルな意見。

その意見に当然激昂し、胸元をつかみあげて、眉根を寄せたその
むさい表情を寄せてくる父親。

「テメエ……！ ほざくのも大概にしやがれよ……！」

「近えよ、ホモくせえな」

野太い腕を軽く払い、咳払いをして続けてみせる。

「人間、死ぬ気になれば何でも出来るんだよ。大抵はな。死に物狂
いのポテンシャルを舐めちゃいけねえ。……な？」

「だが……」

「可哀想とか、笑える冗談ぬかせよ？ それは優しさじゃなく甘い
だけだ。娘の為を思うなら、敢えて憎まれ役にもなってみせる。そ
れが親つてもんだ」

「……童貞のくせに」

「どどどど童貞ちゃうわー！」

間抜けな会話が談笑へと変化していく。

その最中、二人ともが気づいていなかった。

後ずさり、泣きながら走り去る彼女のことを。

五章 南の村へ、ぶらりナンパ旅 後編(前書き)

少し文体が狂ったので、リハビリ中。
ペース落ちてるけど、また復活するかも

五章 南の村へ、ぶらりナンパ旅 後編

泣きながら前後不覚で走り去った彼女がいたのは、森の中だった。見覚えのある森。そう、キノコや木の実を採るための、深い森。

(……………死ぬ、のかな)

勇者キルシュ。彼の冷たい声が、今でも心を鷲掴んでいるようで、でも、こうしたって仕方が無い。私が、こうしていても……………きつと……………いや、ダメだ。考えたら、戻れなくなる。

キノコでも採って、戻ろう。これ以上、何も……………いや、両親にさえ、見捨てられないように。

(ん……………?)

聞こえてくる、声。人の声じゃない。でも、言葉を話している。魔族、でしょうか。

「あの村を襲うんだろ？ だったら、今でもいいんじゃないか？」
「待て、早いだろ。村には大した奴はいないとはいえ、慎重になるのに越したことは無い」

「確かに。流石、分かってるじゃねえか」

……………え!?

「人間を食うのは久しぶりだからな。ありゃ不味いが、あの叫び声が鼓膜に良く響いていいんだよなあ」

「分かるぜ。まあ大切なのは女だけだ、男は不味い、特にな」

「んじゃ、夜まで待つとしよう」

「思わず、私は走り出す。」

「!?!? 聞かれていたのか!?!?」

「やめとけ。ガキ一人の言うことなんざ、誰も信用しないだろ。果報は寝て待て、だぜ?」

「何だそりゃ」

「走らなければ。走らなければ。」

「届け、届け、届け!」

もつれる足に悔しい思いをしつつ、ただ来ていた道を逆送して
く。

駆けて駆けて、夕方ごろに帰り着いた。たどり着けたのだ。

「……………!!」
扉を開けた私の形相に二人　キルシュさんとお父さんは驚いて
いた。

伝えようとするのだが、言葉が出ない。お父さんが聞きそうにな
ったけれど、キルシュさんがそれを手で制する。

「言っただ、ちゃんと。でない、伝わらない」

でも、私は……………喋れない。

「君はもう喋れるはずなんだ。その喉で喋れないはずが無い。要は
思い込みなんだよ」

そんなはず、ない！

「いいのかな？　このまま言わないでよくと、俺は何もしない。危
ないのは嫌な性質でね。でも、君みたいな美少女のお願いには弱い
のさ。さあ、俺に何をして欲しい？」

……………ほんと、に？　喋れるの？

口をあけて、息を吐くのは違う、何かを意識して、息を出して
いく。

「……………あ」
今、声みたいなのが、出た！……………私は、声が出せる。

甘えて、思い込むようになっていたのかもしれない。声が出せな
ければ、誰かが同情してくれるんじゃないかって。

だから……………もう、甘えない。

「……………ああ……………か、み……………!!　おお、かみ！　狼、が、来るの
！　村に夜、やってくるって！　たす、けて……………!!」

そう泣きながら声を出した私の肩を、キルシュさんはぎゅっと抱
きしめてくれました。

「……………よく、頑張った。俺は君を信じよう」

「お、おい、信じるのか……………魔物だぞ？　この近辺には、いないは

ずだ」

「当たり前さ。こんな懸命な嘘なんて、知らない。それに、嘘でもいいだろ？　嘘のままが平和の情報なんだから」

「そうだが……本当なのか？」

「そこまでにしとけ。……じゃあ、一緒に来てくれるか？　俺はね、美少女がいればどこまででも強くなれるんだ」

そう笑い、歯を剥いてみせるキルシュさんに、もう何もいえなくて。

暖かくて……優しい。甘さと厳しい優しさを、くれる人。

すがり付いて泣くのを、許してくれる人。

「おいおい……苦手なんだけどなあ、シリアス」

「偶にはその路線でいけよ、モテると思うが」

「いやいや、おいら遊び人のキルシュさんだよ？　シリアスにゃ肌

がなじまないの！　この珠肌に！」

「あ、腕にニキビできてる」

「うっそマジで!?!」

……本当に、変な人。

「そうそう、あけおめ〜！　今年もキルシュ様がバンバン活躍するぜ！」

「……?」

「いや、新年の挨拶はキチツとしとかないな」

「それ、キチンとしてるんですか……?」

御尤もである。

森と街をつなぐ広場。そこには、キルシュと少女　カティ・フエス（貴族の末裔らしいが、没落しているそう）が姿を見せていた。

その他には誰もいない。二人だけなのは別にいいけど、闖入者が

入る予定だ。

無論、全てを弾圧する。美少女じゃなければ、だが。宵になり、輝く丸い何かが動いてくる。等間隔にあげられた二つの輝きは、双眸。赤い瞳を持って、こちらを威圧してくる。

「……何者だ」

数十匹はいるか。狼の姿をした魔族の一人が、こちらに問いかけてくる。

無論、俺は鼻で笑ってみせる。

「誰でもいいだろ？ てことで……流れ、圧せ。展開するは壮麗たる蒼！ 撃ち出すは侵襲する水弾！」

天に掲げて、放たれた蒼い輝きは、ちょうど村の反対側で炸裂する。遠く、獣の鳴き声が聞こえた。

「ば、馬鹿な！？ なんとという精度……貴様、後ろに目があるのか！？」

「アホ。こんな堂々と姿見せるんなら、挟撃の線を疑って掛かるべきだ。それに、お前らじゃ少なすぎる。狼ってのは、二十四単位を群れとする。お前ら十匹じゃ、都合がつかないんだよ」

「く、クソ！ 娘だけでも食い殺せ！ このクソ魔術師もだ！」

「はいはい。創造し、型を為せ。展開するは鋭利なる刃！」

マジックシェイプを握り締め、魔力を通す。

触媒を経た魔力は鋼となり、槍の形となって手のひらに集約していく。

「創造するは天穿つ無双の槍！」

取り回しつつ、初めて形にしたそれを見る。

方天戟。槍の穂先に月牙と呼ばれる両の刃を頂いた、ポールウエポン。月牙で引っ掛けることや、切り裂くこと、また本来の突きとしての性能も相俟って、使えば無双の武器になる。逆に、使えなければ、中途半端な槍にしかならず、それならば棒でも使った方が早くなる。

月下にて輝く鋼を見た狼はひるむ。そこへ、キルシュは容赦なく

踏み込んだ。

「おらああああああああつ!!」

目にも留まらぬ斬打入り混じつての乱撃が始まり、狼達はなす術もなく切り裂かれ、引きずられる。

見れば、片手で高速回転させている。半ばで持つのではなく、一番後ろの柄の部分で、だ。並みの筋力じゃない。

「く、くそがああああああああつ!!」

「っせえんだよ!!」

ヒュンっ、と風と共に喉笛を穿ち、全滅した狼達へ手をかざした。

「灯し、消せ。燃える車輪の舞」

円となった火炎が生じ、狼達を一瞬で焼いた。

獣臭さが漂うその空間の中、彼女はこちらに対して、驚いたような視線を向けてくる。

「……英雄つてのはな、人や魔物を殺すことで得られる称号だ。勇者つてのは、最高の人殺しつてワケさ。……怖いだろ?」

「いいえ!」

それは、彼女らしからぬ強い言葉で。

震えている。けれども、彼女は強い瞳で、こちらへと歩み寄って来る。

「……しゃがんでください」

言われたとおりにすると、小さな手が頭を撫でてくる。

汗で滲んだ小さな手は、とても優しく感じられて。

「……俺の、ハーレムになつてくれるか?」

そういったこちらの髪の毛を、カティは思いつきり引っ張るのだった。

翌朝、キルシュはワীগナーの酒場に戻っていた。

メルキュールがにらむ中、飄々と席に座り、注文をする。

「おい、ホットドッグとカフェオレ!」

「何か言うことがあるんじゃないんですか？」

「うへへー！」

「またそれですか！？ 分からないですよ、何言ってるのか！」

「メルル、随分と可愛くなっただなあ。胸もませてくれよ、おっきくなるかもよ？ と仰っておりますが」

「今の一言にそんな長い意味が！？ い、嫌ですよ！ えっと、エツチなのはいけません！」

そうやって談笑していると、いつかの商人が何かを置いてくる。

……白いカフスだ。魔力を高める魔布を使っている、高級品。

「ありがとな、勇者」

「……何言ってるんだ？ 俺は女の子口説いて、結婚の約束をしてきただけだぜ？」

「へッ。アンタのそういうとこ、好きだぜ？」

「やめるよ、男に好きとか言われても嬉しくないぜ」

カフスに手を通し、何か悟った目でメルキュールはこちらを見てくる。……ああもう、その目をやめれ！ 苦手なんだよ、そういうの！

「そ、その……」

「お前も何勘違いしてんだよ。俺は、俺のハーレムの為にナンパして、その障害になるものを弾き飛ばしただけ！ ぜーんぶ俺のためなんだっつーの！」

「……ええ、そうですね！」

「チツ……何笑ってるんだよ。こうなりや、おりゃあ！」

「ひゃあああああつ！？ って、私のパンツ！？ 今、ちよつと触っただけでしたよねえ！？」

「これも俺のためじゃい！ ぐふふ、可愛いパンティーちゃん！」

「か、返してくださいいいいいいっ！！」

狭い店内を駆け巡る二人を、スミレは温かな目で眺めていた。いや、助けるよ。

どこかの美少女がいて、絶対に誰にもなびかない。彼女は一人、想い続けているのだという。

吟遊詩人が、今日どこかでそう歌っていた。彼らには、知る由も無い話だ。

「なるほどね」

エトワールは紙面を置いて、メルクリオを改めて見つめる。

「彼、結構な勇者なのね」

「過去について調べさせるのには骨が折れたがな。他の者は恐怖で絶対に口を割らない。……成る程、性に縊るのも、あんな経験をしたからか。納得がいくな」

二人は語らいながら、書面を気にする。

そこには、幼い桜色をした紙を持つ、少年の写し絵が貼り付けられているのであった。

第六章 勇者の過去 前編

あははっ！ まるで夢のようだ！

「おい」

右にはちっぱい、真ん中には並、左には大きいのが並んで、背後には特大が！

「どうしたんだ」

もう、辛抱たまりません！ おひよひよひよ！

「いい加減にしるッ！！」「あ」

「ぺぷしっ！？」

不意に目の前で星が散る。ああ、ちょうどそいつらがいい感じのところへ！？ オイこら、そこをどけ！

思わず手を伸ばすと、柔らかい感触。……ああ、極上お。これが、天の感覚なのだろうか。柔らかくて、沈みこむくせに妙に反発してくるこの手触り。

「もう、キルシュさんったら……そんな、ワーグナーさんの胸なんか揉んで」

「アッ ……！？」

一瞬で凄まじい脳内変換能力が発動し、最悪な絵図らが展開された。……語って欲しいのか？ 全裸のオッサンが頬を赤らめ、そして興奮した美青年がその胸を掴んでいる様を。

飛び起きれば、ちゃんとスマイレの胸だった。もう、小悪魔ってレベルじゃないから、今の冗談。

「あのなあ、四十路を越えんとするオッサンの胸がこんなに張りがあるわけないだろ？」

「今日の昼飯は二段ステーキな」

「あれ？ ワーグナー最近、また若くなったんじゃね？」

「小賢しい嘘を言うな。……今日は味噌バターラーメンだ」

「おう、それくらいなら……。にしても良かったのか、スマイレ」

「ふぁい？」

特盛りのラーメン丼に挑んでいる彼女に聞いてみる。中身は醤油ラーメン。鶏がらベースの醤油ダレに、癖の強い豚の背油を乗せて完成するスープは絶品。黄色い縮れ麺がまたスープと絡んで、モチっとした歯ごたえをくれる。乗っているチャーシューは、本来とろけるくらい柔らかいのだが、分厚くカットし炙る事によって、適度な噛み応えと溢れる肉汁を両立させているワグナーお勧めの品である。

すっかりラーメンと俺に魅せられたスマレは、メルキュールを護送した後、こつちに移り住んできたのだ。今は、キルシユの屋敷に身を置いている。……ここは広い部屋が落ち着かないから住んでるだけだよ？ 勇者だし、住居は別にあるに決まってんじゃん。

「あの城での従事生活が気に入ってたんだろ？」

「まあ、バレる可能性もありましたしね。それに、ラーメンの作り方を教えてもらおう約束ですし」

「……手を出すなよ、ワグナー」

「はあ？ ……あのなあ、オレにも恋人がいるんだぞ？」

「うっそマジで紹介して！？」

「驚きと欲望を同時に吐き出してんじゃねえ。……ほら、そこで飲んでるだろ？ あの金髪だ」

控えめに手を振る金髪の妙齡な美女。……ああ、なんだ。

「人の女批評するのは趣味じゃないんだが、俺の趣味じゃねえな」

「そうなのか？」

「……同属嫌悪って奴さ」

そう言うと、小声でワグナーが尋ねてくる。口すら、彼女に見せていない。

「血の臭いか」

「ご聡明で。もう限りなく薄いけどな、子供の頃辺りに相当殺つてるよ」

「時期までか」

「目が、俺と同じだろ？ …… ああいや、数はそんなじゃないな。大切な人を、殺してるっばい」

味噌ラーメンが手前に置かれる。麺は醤油麺よりも太く、よくスープと絡むようになってる。スープは自家製の味噌を使い、濃厚に仕上げた野菜スープと魚貝出汁で入れ混じることにより、野菜の甘さと魚貝の深み、味噌の風味が引き立てられている。調和はしておらず、味噌が強い。そのお陰で、魚貝の癖は完全に飛んでおり、魚介類が苦手な奴だって、安心して食べられる味。乗せられたバターが蕩けて行くのがにくい。赤い七味唐辛子を振れば、旨みで馬鹿になりそうな舌を起こしてくれて、これまたいい。

野菜との相性も抜群で、こここの三大ラーメンの一角を担っている。勿論、醤油ラーメンも一角だ。

「……残すなよ？」

「残した事はないだろ、お前の飯は最高なんだから」

「言ってくれるな」

含み笑いを浮かべ、女性の元へ歩いて行くワグナーを見送る。男見せるよ、ワグナー。

ともあれ、味噌ラーメンに挑みかかる。啜りこめば、相変わらず、上手いの一言に尽きる。これを真似しようとしているのか、スミレよ。侮れん奴だ。

ふとスウィングドアが揺れ、一人の女性が入ってくる。それは、殺人的なスタイルと美貌を誇る、美女の姿だ。

「よお、エトワール！ 戻ったのか」

喜色満点で迎えると、彼女も微笑み返してくれる。ああ、何か久々に見た気がする、その笑顔。

「ええ。はい、お土産ね。盗って来た下着とその娘の写し絵」

「おっほおっ！ これはあっ!？」

これは、伝説の縞パンチュ様!? ああ、何かその微笑に後光が差して見えるよエトワール!

しかも写し絵もメツチャいい感じ! 蒼髪ロングの、ドジしてる

メイドさん！ 大好物ひゃっほう！

写し絵を覗き込んでくるスマレが、口の中のものを咀嚼し、飲み込んでから説明を始める。

「ああ、ラピスですね。最近入った、幼いメイドです。両親が魔物に殺され、隠れていた彼女だけが生き残ったって話を聞いたことがあります」

「へー。まあ過去はどうでもいいけどさ、いいねえ……どじっこメイド」

「私もどじっこになった方がいいんですか？」

「有能なメイドさん、大好きです！」

「もう、キルシュさんったらあ〜！」

ペシペシと肩を叩いて笑ってくれるスマレ。その様に、嫌味ない笑顔を向けるエトワール。

「一人目なのね、キルシュ」

「おうよ！ お前はどうか？ 犯人はいたか？」

「見当たらないわ。あそこにいる騎士や給仕の青少年達は全員、気づかれずにひん剥いたんだけど……」

「……そうか。まあ、何か食えよ。奢るぜ？」

「……ねえ、聞いていい？」

スマレの逆隣に腰をかけ、エトワールは神妙な顔をして、首をかしげた。

「あなた……何で、笑ってられるの？」

それは、子供みたいな純粹な感情。

だが、子供は知らない。えぐるような質問だって、子供は無垢なまま問いかけてくるのだから。

タブー。それを知らないのだから、彼女の質問だって至極当然だ。過去に、あなた……何かあったんでしょ？」

「……どこで知った？」

「ちよつとね」

「なるほど、メルのとこに行ってたのはその為、ね」

ため息をつき、とりあえず、ラーメンを食べ終える。
しっかりと聞き耳を立てているスミレにも説明する、いい機会か
もしれないか。

「んじゃ、聞くか？ ……俺の、つまんねえ過去話」

お冷で喉を湿らせ、俺はとりあえず、笑ってみせる。

ちゃんと笑えているか、わからないまま、俺は口を開いて見せた。

六章 勇者の過去 前編（後書き）

今回はシリアス入ります。ギャグも入れたんだけど、そんな余地があるかな？と思ったので、最初はギャグ攻め。

六章 勇者の過去 後編（前書き）

ほら、シリアスつまんない

次回からは、元のおばかに戻ります。

第六章 勇者の過去 後編

少年がいた。

勇者の家系に生まれ、兄と共に修練を積み、兄は剣術、弟は格闘術で育った二人の勇者。

両親は既に他界。病気だったと聞くが、詳細は不明。

そして、二人で育った兄弟は、十歳のときに離れ離れになってしまっ。

一人は兄のスカレット。魔物の集落に赴き、旅立った後だ。

残された弟 キルシュは、生まれた村で、兄の帰りを待っている日々を送っていた。

幼いキルシュは、遊びがてら、山菜収集にいそしんでいる最中。

村の人に、食材を提供する。その代わり、料理をもらっていたのだ。意気揚々と山菜を摘んでいると、開けた場所を見つけた。それは村人も知らない、言わば秘境という場所。

花々が咲き乱れるそこで、一人の少女が花の冠を編んでいた。

それは、恋だったのか。

長い葡萄酒色の髪をなびかせ、その同年代くらいの少女がこちらを見る。

真っ赤な大きな瞳には、何故か恐怖。だが、構わずに、キルシュは近寄って行く。

「すげえな！ 冠、編めるんだ！」

「え…………？」

「冠だろ？ あれ、違ったっけ？」

「う、うん…………。あの…………だ、誰？」

「おれ？ おれ、キルシュ！ なあ、いっしょに遊ぼうぜ！」

「…………あ、あのわたし…………半魔、だよ？」

「お前が何したんだよ」

「な、何もしてないよ…………」

「だったらいいじゃん！ いっしょに遊ぼうぜ！ おれの村、同じ年のやつがないんだよ。なあ、かけっこしようぜ！」

戸惑いながらも、女の子は差し出した手を掴んでくれた。

彼女の名前はグリーン。赤い目をした、女の子。

村に誘っても来ないくせに、おれには約束ばかりしてくる。また会ってくれるよねって。当たり前じゃんそんなの。

それから、グリーンとばかり遊んでいた。

かけっこ、かくれんぼ、石投げ、冠作り。おままごとは恥ずかしかったけど、やるとグリーンが喜んでくれて。

いっしょに森を探検したり、いっしょにご飯を作ったり。あいつの家は洞穴で、お母さんと二人で暮らしてたみたいで。

おれの姿を見て、そのお母さんも驚いていたけど、笑って迎えてくれた。

そんなある日の事だったんだ。

幸せなんて、そう長く続かないって……思い知ったのは。

村の小屋から出る。ポケットには、グリーンへのプレゼント。魔力を込めると光る、魔光石。探検家とかが使ってららしい。洞窟で偶然、拾ったのだ。

意気揚々といつもの場所に向かう途中で、騒ぎが起きているのに気づいた。

駆け寄って行くと、徐々に見えてくる。

桜色をした髪を持つ、グリーンのお母さんが血まみれで。そして、

グリーン　彼女が、倒れていたのだ。

「どけっ！」

寄り集る大人を突き飛ばし、駆け寄る。

グリーンのお母さんの身を起こさせると、腹部から滾々と血が出ていた。人為的に傷つけられたもので、周囲を見ると、全員が武器や農機具を握って、敵意を向けていた。

「この人が何したんだよ！」

「半魔のガキを庇ってやがったんだ。どけ、キルシュ。止めを」
「ざっけんじゃねえ！」

差し向けられていた剣を、気力を込めた拳で破壊し、キルシュは
吼える。

「この人たちが何したんだよ！ 悪い事、何もしてねえだろ！」

「半魔は生きているのが罪だ！ 人間にも魔族にもなれねえ出来損
ない、なのに力だけはある！ そんな化け物、先に殺しておくべき
だろ！ どけえ！」

「……ふざけんなあ！」

拳を握り締めて、言った男へと殴りかかる。

殴って殴って、殴られて、蹴られて。まだそんなに強くも無かつ
た頃で、自衛団長に踏みつけられ、動けなくなる。

「……キルシュ、お前も目を覚ませ」

「手、え……だして、みるお！ 絶対に、おまえら、ゆるさねえ……
……！」

「このクソガキ……！ 黙ってる！」

振りかぶられる棍棒。迫るそれを、瞳そらさず見つめる。

と グリンの目が、光った。

「やめ、ろおおおおおおおおおおおおお」

「ッ……！」

半魔。母は人間、父親は魔王族の魔族。

魔王の系譜。人知を超えた力を発揮する、最高位の種族。

火炎を引き起こし、他の人々を弾き飛ばす。灼熱が地を這い、渦
巻き、村を火の地獄に変えてしまう。

啞然として、キルシュは起き上がる。

グリンは……物言わぬ母を抱き上げ、泣いていた。

「キルシュ……楽しかったよ。勇者だって知ってても、嬉しかった」
「えっ!？」

「言わなくても、噂が聞こえたもん。勇者の男の子だって。……半

魔のわたしと仲良くしてくれて、遊んでくれて……」

「違う！ お前だから遊んだんだ！ お前と遊んで、楽しくて……！
してやった覚えはねえよ！ いっしょにしたんだろ！？」

「……でも、勇者なんですよ？ だったら、村の人を……殺しちゃ
ったわたしを、殺さなきゃ」

「ざけんなっ！ ……ざっけんなよお！ お前は、おれの為に……」
少年の独白は、あまりにもむなしく響く。

焼けゆく家屋。焼け逝く人々。村の様は長閑な田舎から地獄に変
貌していった。誰が、望んだわけでも……無いというのに。

「おれ、どうすればいいんだよ……！ お前を、殺せるわけ、ない
だろ……！」

「キルシュ。……勇者でしょ？」

「勇者なんて、クソくらえだ！ 大切なものを奪う勇者なんか、お
れは知らない！ みんな守って、みんな笑って、悪い事してる魔王
倒して、みんな生きてる最高にカッコいいハッピーエンド！ それ
が、勇者のエンディングだろ！？」

言っていて、分かっていた。

そんなの、都合のいい理想でしかない。勇者なんて、所詮は名前
だけ。

清濁併せ呑まなければ……生きていられないと。

英雄は大量虐殺者。勇者はただの道化。

でも……そんな、責任ばかりがつかまとう、職業。

「……他の人に、殺されたくないもん。ねえ、キルシュ……？ わ
たしのこと、好き？」

「あつたりまえだ！」

「……じゃあ、好きな人をいっぱい作ってね？ その笑顔で、わた
しみたいに好きにさせて？ キルシュなら、絶対かなうよ！ 最高
に……ハッピーなエンディング。だから、笑って？」

「でも、エンディングにおまえがいなきゃ……いみ、ないだろお！」
涙交じりの声を聞いて、グリーンはその口に口を重ねる。

かすかに血の味がする、苦いファーストキス。

「……………ね？」

「くっそ……………！ くっそおおおおおおおおおおおおおお

おお

ッ！！！」

右手に残る感触は、今でも忘れない。

「愛してる……………キルシュ」

グリーン。彼女が教えてくれたものは、あまりにも多すぎた。

友達。いっしょにいる事の大切さ。力の優劣。勇者の苦悩。愛し

い人を殺す感触。……………初恋。

「やったあ！ あの魔族、キルシュが殺したぞ！」

「流石、勇者だぜ！」

「よくやったねえ！ さあ、消化して頂戴？ 魔術が使えたわよね

？」

……………なんで、だ？

あいつが死んで、なんで……………こいつらが、生きてるんだよ！ 何

もしてないあいつが、何で死んでるんだ！

「し、ねえ！」

拳を振り上げ、気力を込めて村人の顔面を打ち抜いた。肉が爆ぜ、

死体が一つ完成する。

「……………くそっ！ くそっ！ くっそおおおおおおおおおお

おおおっ！！！」

そこからは、逃げ惑う人々を殴り殺していった。

気づけば、炎の中に一人立っている。血塗れの拳を焼け残った壁

にぶつけ、ただうわごとのようにグリンの名前を呼んでいる。

そして、最後にこう呟き、そこ場所を後にした。

勇者なんて、クソ喰らえだ。

「ほら、つまんない」

笑って見せると、堪え切れなかったのか、スマレが泣き出してしまった。エトワールも沈痛な表情を浮かべている。

「……どうして笑ってられるか、だったよな？ そりゃ、笑って欲しかった人が俺にそう望んだからさ。ちなみに、ハーレムとは関係ないからな？ 俺が女の子が好きだから、そうしただけだって！」

「もう、いいわ。ありがとう、キルシュ」

「……まあ、話したい話題じゃねえしな」

肩を竦めると、残った冷を全て飲み干し、お代わりを要求。グラスを振ってみせるのだ。

と、スマレが注いでくれる。泣きべそをかきながら、何度も頷いていた。

「……ずっと！ ずっといつしよです！ キルシュさん、胸なら幾らでも貸してあげますから！ いっしょにハーレム、作りましょう！」

「おう」

笑い返し、キルシュは冷を飲む。

エトワールは出していたペペロンチーノを器用に巻いて、口元に持ってきてくれた。

「はい、あーん？」

「お、おう……？」

食べさせてくれるエトワールは、優しい顔をしていた。

事情を知るワーグナーはそれを見て、そっと目を伏せた。……あ、あの女の子、指輪してやがる。うまくやったなワーグナー！

「おーい」

「なんだ？」

「今夜は、俺が店番しといてやるよ。この三人で、な？」「はい！」

「ええ」

「……馬鹿野郎。ありがてえじゃねえか」

男同士の友情も確かめ合い、時間はふけて行く。

悲しい事があっても、時間だけは変わらないのだから。

七章 巫女さんと言う素晴らしい存在 前編

「やあ、平和だねえ……」

ハーブティーを飲みながら、朝日に身を浸す。

ワーグナーの酒場の屋根。そこで、ティーカップを片手に朝日で一杯。たまに着替えも覗ける、最高スポットである。

ハーブはカモミール。柔らかく香る匂いとまろやかな味わいを堪能しつつ、まばゆい朝日に乾杯してみせる。

ちなみに、これは朝帰りしてきたワーグナーに淹れてもらった物だ。しつぱりしていたか聞くと、いい笑顔でコイツを淹れてくれたのだ。今日ばかりは、いい気分^とに浸らせておいてやろう。

「うおっ!？」

思わず受け止めたのは、矢だった。先端に紙が結ばれている。

「……この受け渡し方は……東の連中か。めんどくさいけど、無視するとさらに面倒だからな……」

手紙を開いて、読んでいく。

「何々……大蛇が出て死者多数。勇者に援軍請う。尚、生贄にするのは純潔なる別嬪の巫女さん!? バツ力野郎!」

巫女さんって言えば、緋袴に白い襦袢が似合う東洋が生み出した最高の服着てる女の子じゃないか! そんな稀有な属性を、みすみす死なせてなるものか! しかも処女! ……てか別嬪^{いしえ}って、なんでそんな古の言い方を……。

「ふひひ……! 巫女さん巫女さ〜ん! 蛇を倒して、巫女さんゲツトだぜ! よ〜し!」

「楽しそうね」

ひょいっと顔を出したのは、エトワール。寝ぼけた顔がとっても可愛くて綺麗です、朝日よりいいもの拜んだぜ。

「よう! これから蛇を倒して巫女さんげっちゅしてくるぜ!」

「ワケが分からないわね」

「まあ、ガールハントだ」

「ぶっちゃけたわね、この朝のようにすがすがしいわ。……私も行くから」

「そなの？」

「あら、私だってハーレムの一員よ？」

「え、何その嬉しい情報！？ いいの加えちゃって!？」

「ええ。その代わり」

「俺もお前のハーレムの一員、だろ？」

「察がいいわね。……あら、それは？」

「こちらの懐にある書物に気づいたのだろう。取り出して見せて、ばらばらと中身を開いてやる。」

「読めるけど、ワケ分かんねえ代物だ。魔術みたいなんだが……どうにもな。『柊』と書いてあつてな」

「やって見ればいいんじゃない？」

「そうだな……」

距離をとり、魔力を集約させる。

「ロリババアに扱き使われ、幼馴染の巫女さんがいるそいつの力を、今……！ 柊！」

輝きが全身にまわりついてくる。そして、何だか体が熱くなってくる。耐え切れないわけじゃなく、何だか息苦しいような。

気がつけば、服がダボダボ。視線も、かなり低くなってる。

「どうなってる？」

発した声は、えらく高い。

エトワールは滝のような鼻血を流しつつ、顔を背けながら親指を立てた拳を突き出していた。そうか、シヨタ好きだったなあお前。

「ね、年齢が下がっているみたいね。グッジョブよ」

「鼻血拭けよ、いいから」

「お、お姉ちゃんって言ってみない？」

「お姉ちゃん！ 大好きだよ！」

「ぶっはあああああああああ　　っ!？」

……うわあ、蒼いドレスが血でえぐい事になってんで。

にしても、我ながら縮んだものだ。体も軽いし、拳にもちゃんと力が入る。……ああ、昔に戻ってるのか。

「解除」

ぼふん、と間抜けな音と共に、元の姿に戻る。魔力供給を止めてやれば、元に戻るようだ。もっとも、そんな器用なのは俺しか

「ん……？」

と、いう事は……？

「全員ロリ化し放題!? ひゃっほう！」

「幸せね、貴方」

「今のお前には言われたくねえな」

朝日を浴びつつ、盛大に鼻血を流し続ける美女を見つめる俺の心境やいかに。

……あ、東に行くことになりました。

七章 巫女さんと言う素晴らしい存在 前編（後書き）

分かる人にはわかるネタ。TRPG好きなら、嫌でも知ってるんじゃないかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7655y/>

スケベ勇者の桃色珍道中～目指せ、ハーレムの旅～

2012年1月12日01時50分発行